

02-SI

海老澤文庫

新約聖書約翰傳

全



耶穌降生千八百七十八年

翻譯委員社中  
米國聖書會社

# 新約聖書約翰傳

明治十一年

日本橫濱上梓

海老澤有道文庫

約翰傳福音書

## 第一章

太初

はこととをある。あるとある

神と

ともある。あるとある

なほち神なるをニこの道をはドめは神とともある。あるとある

物らあるよあるを つまらる。つまられたるめはは

あるよあるを つまられをなす

人のひうをなす 五 光をともらるよある暗

あるよあるを つまらる。つまられたるめはは

あるよあるを つまられをなす

あるよあるを つまられをなす

あるよあるを つまられをなす





證をなさんたらあまたきくられし 九 それまづての人故てらば眞  
のひうまの世はきくられし 十 うれ世はあまよハかきよはく  
られたるに世はきくられし 十一 うれおれ色の國はきくられし  
よその民はきくられし 十二 うれ世はあまよハかきよはく  
ものまハ權張たまひてられし 十三 神の子となせし 十四 うれ人  
て血脈あまよふあらば情慾はよるにあらばひとの意はよ  
るよあらば 十五 神はよまをてらまれし 十六 赤そ色は肉  
體となりてられらのうちよやとれし 十七 それらその榮をみる  
よまことよ父のうもたまくる 十八 獨子のさつえよ 十九 恩寵と  
眞理あてみてし 二十 ヨハネあねが 證張あしよびひけ

るまはきくられし 二十一 われよおくまきくられし 二十二 我よりまき  
れるもの故なる。そそ我よりまきくありし 二十三 ありし 二十四 ありし  
いひし 二十五 この人あま 二十六 われら皆うれよみちくる 二十七 中  
よまうけてめまみは恩寵張まはく 二十八 律法ハモ一ゼは  
よまてはまを甲めまみとまことハ 二十九 耶穌キリストよまをてき  
たれし 三十 神をみし 三十一 ひとあはれた 三十二 うみたまくるひ  
とま子まはち父のあとにありあま 三十三 ありし 三十四 ありし  
まをて 三十五 ヨダヤびと祭司とレビの人故エルサレムに  
ヨハネのまはははつち 三十六 なんぢハ誰ぞとまをてめたるこ  
まあの一せること左のごとし 三十七 平彼かえはまあなるひ



あらまゝして我をキリストよあらばとおきらうよいなり 二三  
とさひけるはさうらばなんぢハ誰をエリアなるものいふと出  
たふまゝとあんぢえこの預言者あることとさひよとさうらば  
とさうらば 三 あつにおひくうれらまゝと問けるもなんぢ  
もたれあるものそれとつづきせしものよとさうらば 四  
とさうらば得やうらばとつづけよ。なんぢみづかういふより  
や 三 ヨハネのいふことハわれはまゝなるも主の道はなほくせよ  
と野ふよとさひとのまゝなるも預言者イザヤのいふこととお  
と 二 それほつとさうらばたう人こそバリのサイのひととなりき 五  
とさうらば ヨハネよとさひくういひけるはさうらばなんぢハキリスト

よあらばエリアよあらば彼よげんやあもあらばしてあふ  
ぞバプテスマを施まや 六 ヨハネあつていひけるは。まゝなる水  
流もてバプテスマをさうらば。さうらば。なんぢらがあらざること  
あらばこの一人なんぢらのうちふくはる 七 マゝなるよあらば  
とさうらば我よまゝなるものよあれはまゝなるハその履のむ  
もはとくもたうさるもはあふ 八 あれおとをヨハネのバプ  
テスマはとさうせしヨルダンのむうあるベタニヤあてあふ  
あふ 九 あらる日ヨハネ耶穌のおのまゝなるをみてい  
ひけるハ世のつみはあふ神の羔羊みよ 十 マゝなるよあらば  
たらんものよ我よまゝなるものあらば。そはわ色より 以前



にあまうしそのなれがあまるとわがいはひーハこの人なり 三  
を素よりそられ人とあまうしに。されとわがきくをて水よてバプ  
テスマをほほどころけハうれをイスラエルの民よあまうしさんかた  
めなり 三ヨハネまうし證していはひけるハ。われ靈の鳩のごと  
く天よまうしをてそれうへまうしまねるを見らる 三  
もわれ強あまうしをて我をたつち水あてバプテスマなれど  
あまうしめーそのうれよひくちまあんち靈らまてそれ  
うへまうしあまうしをて聖靈をもてバプテスマなれ  
それあり 三  
あまうし日まうしヨハネあまうしその門徒ともになれ 三  
耶穌

のあまうしをみて神の羔をみよとり 三  
きて耶穌よあまうしゆき 三  
我回顧てなんぢらあまうし求やとうれらまうし。 三  
ラビいばくまやとるやとり。ラビを譯を師とりの義あ  
まうし 三  
きてそれやとるまうしとる我見てあの日まうしにやられ  
甲時をひるは四時らありき 三  
て耶穌よあまうしもの。それひとりあまうし  
ペテロは兄弟アンデレーなる 三  
あまうしいはひけるも。われらメッシヤよあまうしメッシヤを譯を



キリストあり四三 まかちちくれを耶穌いはいははをゆききしよいひに  
 視てこれよひひくるはなんぢハヨナの子シモンあり。あ  
 ぢのケバとやあくらるべーケバ茲譯バペテロなる四三 ○あ  
 ちるひいひにガリラヤはゆんとしてピリポはあひわれよ  
 ちさぐくとりし里四四 ピリポもアンデレーとペテロのまかち。  
 ベツサイダとつくる邑四五のひとあま。ピリポナタナエルはあひ  
 てひひけるもまかちる律法かきのちよモーゼグをせしむること  
 預言者いはいたちのあるせーところのものよあけり。まかちち  
 ヨセフの子ナザレいはいの耶穌いはいなる四六 ナタナエルいひくるもナザレ  
 ようまかちの善者よきものいでんやピリポこれよひひくるまかちり

くらみし四七 耶穌いはいナタナエルのおのづかゆにまかちるは見かれと  
 さしてひひけるも視をまこと四八のイスラエルの人よしてそれ  
 あら詭譎ごごなきものぞ四九 ナタナエルいひによひけるハ  
 ちまてそれとあまたゆみや耶穌いはいこれよあててひひけ  
 るはピリポがなんぢをよばざるはまは無花果樹いはいのあてに  
 かんぢのまかちるをみし五〇 ナタナエルあててひひけるも  
 ラビなんぢも神の子なりなんぢもイスラエルの玉あり五一 耶  
 穌いはいこれよひひけるもなんぢが無花果樹いはいのしよまをれも  
 をわづみしとつくるまよまてあんぢ信する五二。これよま  
 あはひあるまを爾まかちみるべー五三 まよひひけるも我まこと



よまてこゝになんぢうよつかん天ひらけそ神のつゝひたも  
人の子のうへにひろをまらぐりまらびみん

第二章 第三日小カリラヤのカナアて 婚筵あそーテ 耶穌のたて

もあ、よまてをい 返れとそれでーも 婚筵よまら糸ころ。ぶ  
だう酒はきりねバ母い 返れよいひらるハうねらゝ蒲萄酒  
なー 四 い 返れうねよつひけるハ婦よなんぢとわれとあゝ  
のか、もをあゝんやまら時いいまざつころは 五 それを  
僕とあふむうひてうねがなんぢらゝ命をさしころれこゝと  
返せよとつひあけそ 六 エタヤびくは潔の例よまらがひて四  
五斗いその石甕むらうーあゝまらあそーあそー 七 耶穌も

べらまゝ水はかめよみとせよといひたねバかきろ口まを  
みらせとそ 八 まらこれと今らみとそを掲ゆきあらまひと  
つうさともゆのよまらせとつひけきバうねらわらせり 九  
筵をつつさともゆの酒ようはそー水とみらまらまらまらり +  
あるまひとつうさともゆの新娶はよびてうねよつひらる  
たあをよそ人いまら昔酒返りぐーさけたけやなまらよあ  
よびてあゝき酒とつうたよなんぢのよきさけといま、で  
とどめあけそ 十 まらこゝに 耶穌がガリラヤのカナうまか  
せるハ休徴のたどめよーてそれ築城あらをせり門徒うを



茲信バ〇 三 これのち耶穌そのをて 兄弟およびでーとち  
カペナウムよりそれとてさるごとひさしとらば  
て 十三 ユダヤびとに 踰越節ちらづきとれば耶穌エルサレムよ  
おぼて 聖殿をて牛ひつと 鶴をとりて 鞭をうたはれし 兎銀はるもの  
の坐せるとはみま 繩をりて 鞭をうたはれし かよひ羊の  
一をみやよりおひつと 兎銀はるもの 金をちらしその  
案をたふし 大鶴をうたはるものよひ多るハこの物故とりて  
ゆけ我ちのゆくとあきなひの家とほるたれ 十七 門徒と  
ちなんぢのゆくのよめは 熱心さればとんと 録された  
るとおもひつとせむ 十八 ユダヤひとあてて 耶穌よ

つひけるもなんぢこれとて かくはなれしとて かくはなれし  
あふの休徴はるや 十九 耶穌あてて。なんぢらこの聖殿  
をまほせわれ 三日よてこればたんとしひたれば 二十 ユダヤ  
人のつひけるハ此みやとてはるもを 四十六年を算しよなん  
ぢ三日よてこればたつら 二十一 耶穌のかつとるもをばら  
らぶの殿をさせるなり 二十二 死よりよみとるもをさるものち  
門徒たちいふにのうれとてをうらりておひひつと 聖  
書とこれのつひとてはを信せむ 二十三 さて耶穌まきこりの  
節はエルサレムよあてしよかほくの人のうれのなせしあるし  
てみてそれ名をなんせむ 二十四 耶穌とてうれとてはまか



せほそはほぐての人故志をまこひとのころるのうちを知  
がゆゑよ人よほいと證とつるもの故ゆゑめざをなかり

第三章

ユダヤびとに宰あてバリサイのニコデモといへるひ

とあまニうれよる耶穌よきまをていひたるハラビマねら

なんぢハ神よきまをていひたる師なまとあるその神の人

もあらはをなんぢがあせるこの休徴いひとこれとなんこ

とあまをていひたり耶穌よたてていひけるいまこころに

まこころに爾よつけん人のあうたよ生まれはを神の國を

みるこころあまをていひたりニコデモうれよいひたるハ人もや老ぬ

ればいうぞまこころまをていひたりこころを得んやあまをていひ母のちら

よいりてうまをていひけんや耶穌こころけるいまこころよ誠

おなんぢよつけんいとい水と靈とにうまをていひ生まれを

神のくによつるあまをていひたり肉よまをていひたり

るまの肉あまを靈よまをていひたりハ靈あり

爾よあうたよまをていひたりとていひて奇とほるあうれ

ハ風いおのぐまよまをていひたりなんぢそに聲をきけどもいほく

よりまをていひたりいづこ一ゆく故志をていひたり靈よまをていひたり

るいおれもかくのこころニニコデモあまをていひたり

こころあらんやとり耶穌こころていひたりハなんぢを

イスラエルに師あまをていひたりこのあまをていひたり



は誠よたうんちよつけん。それうあまうううとをひ見あを  
を證するおたうんちのあううううううううううううううう  
地のううううううううううううううううううううううう  
んうう何てあんはるうううううううううううううううう  
る人の子のあううに天よのぼるううううううううううう  
をあげうううううううううううううううううううううう  
信じるうううううううううううううううううううううう  
たうあうううううううううううううううううううううう  
とを愛うううううううううううううううううううううう  
るううううううううううううううううううううううう

神のそれ子とよふはううううううううううううううう  
たうんううあううううううううううううううううううう  
たか色紙あんううううううううううううううううううう  
たまでうううううううううううううううううううううう  
子の名をあんせううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう  
らうううううううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう



のくち耶穌イエスでーとユダヤの地ちはツツるま。ととせにかーこまど  
とまりてバプテスマをほどこすは 三 ヨハネもまうとサリムはち  
うきアイノムは救すくえてバプテスマを施おとす。うーこも水みづおほきふ  
ゆゑありひらぐきうりてバプテスマ救すくうけうり 四 このとき  
ヨハネハソまご獄ごくはソきられざりき 五 ヨハネの門徒かどと  
ユダヤびとくまうりめごとようきてあうそひりりくるは 六  
うれしヨハネはきうりてソひけるハラビ視みよなんぢととも  
よヨルダンのむうふはあきてかんぢが證あかしせしものバプテスマ  
救すくあどくまよみなうれしきうれを 七 ヨハネこころてソひ  
ける者ものひとハ天あまよをたまふはあうぎもばうともることあ

はぎるなり 八 うれハキリストはあうは。たよそのさきよ遣つかさ  
れしもれなりとソひしころを證あかしするものもなんぢらあり  
元もと新婦よめ救すくあてもそのを新郎よめどなりまをなむこの友ともたちてその  
あゑときうりはこれようきてよろこびおほし我われのぬあひの  
喜よろこみつるころをえたま 九 うれをかろは盛さかはあをわれを  
うあうはおとろあべー 十 天上あまよりきうりてそのた萬物よろこの  
くもよあり地ちよりソづるまはちよ屬あつそののゆめとらうも  
地ちのことなり天あまよりきうりてまはちをんぢの上うへはあを 三  
うれハみづうろそれ見みしとろ聞きしとろのころを證あかしと  
あはよそのあうーをうらるまはたし 三 其の證あかしをうけし



のハ印をもて神の眞あるところをあらわし、神のつのはせ  
しものハ神のこころはとかがる。そは神これハ靈をたまひて  
うぎりあければなり。父を子をあいして萬物をその手よ  
さづけたまふ子とあんなむものをかぎりなき生命をえ子よ  
あつてをさぐるものハ心のちを慰へてなえと。うら神の怒そ  
はうくよらまけん

第四章 主おのを此門徒をとれることまはバプテスマを  
せらることヨハネよりをもおほしとバプサイの人のきこ  
あるニされどそは實ハいほみづうらバプテスマをほとこ  
せるよあは門徒これ依あせるなり。それときユダヤは

さうそまはカリラヤよゆく。サマリアを履びてゆくことあ  
たもは。つひはサマリアのスカルとつくる邑よいこれをお  
のまらハヤコブをその子ヨセフよあはこ。地よちう。こ  
こはヤコブの井あり耶穌とびのつづれよそそのあひのこ  
たりは坐せし。ときひひるの十二時うらなりき。ひら  
のサマリアの婦みづをとまんてきりりねば耶穌そのを  
んあよむうひてそれよ飲せよとりか。そはでーたち食物  
はうをんうめよ邑へゆきてちうさる。ゆえあり。九 サマリア  
のきんあひひらるそなんぢハユダヤ人よ。てなうぞサマリア  
の婦あるわれよのむこら。はもくむるや。こハユダヤびと



サマリヤの人々をまじりておぼせざれをかり 十 耶穌らとて  
いひけるぢあんぢもー神の賜とせられよのませよといふも  
のに誰あるはあはれんぢもあはれん。さうバ活るも  
づぢなんぢもあはれんぢもー 十一 ぢんふ耶穌よいひけるは主よ  
つる屋敷と井もまじりてあはれんぢもいづくより汲てそのい  
ける水はまじりてあはれん 十二 くら井にわれらの先祖ヤコブのあは  
れしところあり。うれもそれ子もまじりて畜までもみふこれ  
はのみとせ。なんぢは彼よりもまじりてあはれんや 十三 耶穌  
らとていひけるはまじりてこの水はのむものもまじりて渴ん  
十四 されどわれらあはれん水はのむものもかきをたぐうわく

あはれん。うらわれらあはれん水はそれらちあて泉となり湧  
つていひけるはまじりてあはれん 十五 ぢんふいひける  
は主よわれらかわくことなくまじりてあはれん水とまじり  
きとぬらぬらめそれみづぢわれはあはれんよ 十六 耶穌いひける  
はなんぢもまじりて夫とまじりていひけるは 婦あはれんていひけるは  
それよ夫あはれん。いひけるはいひけるはをらとなくといひけるは理  
なり 十七 それなんぢもまじりて五人のをらとあはれん今あるもの  
はなんぢの夫はあはれんぢのいひも真なり 十八 せんな  
いひけるは主よわれらぢを預言者とせられん 十九 われらの  
列祖はこの山にて拜せしよなんぢらに拜せしよとてあは



エルサレムなるを以てソレニ 三 耶穌ソレハ信するハをんあよるを信  
せよたゞように山のみよあはれ。まゝエルサレムのみよあはれ  
レシてなんぢら父城をいさぐき時きうらん 三 かんぢられ  
拜するもの誠なんぢらハあはれにわれらの拜するものをわ  
れらハ信する。そは救ハユダヤびとよをいづるがゆゑなり 三  
まことの拜するものは靈と眞をもてち、ををいさる時き  
らん今それときよあはれを。それ父ハかゝのこゝとをいさる  
もの誠要たまふ 三 神ハれいあはれハはいさるものまゝ靈  
とまことをもてあはれ拜はぐきなきを 三 婦ソレハ信するキリスト  
とやあはれなるメシヤのきうらんこゝとを信するうれ來るときを

登てのこゝとを信するはつげん 三 耶穌ソレハ信するハをんあはれ  
かゝるこゝとを信する我をそれなきを 三 とき門徒きうんをてこれ  
のぞんあはれこゝとを信するを奇多れどもそれなきをゆゑとあるやま  
さなふゆゑこれとこゝとを信するところもそのもなりき 三  
婦そのみら瓶水のこゝとを信するはつげん 三 耶穌ソレハ信するハをんあはれ  
わがまべてなせしこゝとを信する我はつげん人をきうんをみよこ  
もキリストあはれはや 三 ころよかいそ人々まちをのぞき 耶穌  
のゆゑよまきうん 三 されあはれと門徒うれし請てラビ食  
らまくとひひたれを 三 耶穌うれしよひひたるとわれよな  
んぢらにあらざる食物あり 三 でしたらぶひよひひたると食



物をうねるおろそかにせよ誰なるや 三 耶穌うねるよソビ  
るるを我をつつをせよものれ旨よあそぐひそは工錢なり  
をばるこれまが糧なるを 三 なんぢら穫時よなるまはあむ四  
月あまといまばや。それなんぢらよつ々ん目試あげてみよ  
はや田ハソろづきそをうねるときよなれを 三 獲ものほそ  
の工錢をうけて永生よソくるづき實をあらむのきて播も  
のこのるものともんよろこをん 三 うれたまきこれハ獲  
とソくるハこれよつきてまことなり 三 うれなんぢらの勞  
せざりしところとくらせんとしそなんぢらをつつをせり  
他のひとぐ勞せよよりなんぢらハそのらうしける果と

うけろを 三 うれ婦わづなせよまべろはこをこられ我よは  
か〜と證せ〜こをなよよをそその邑のサマリアびとあほと  
耶穌とあんせを 甲 ころよあつてサマリアのひと耶穌のものと  
よきうりてともあどがまきたまひんこををねるひ〜うべ  
いさほころよ二日とよまねを 三 彼のこををよよをて信せ  
〜のさきよをもあむうりき 三 うれ婦よソビ今  
あんぢのソビ〜こをよよをて信まらよあそばるねらみづ  
ころきして此ハまことよ世のまらひぬ〜と〜をうねるな  
る 〇 三 二日まきそて耶穌あつてをさそガリヤよゆけを 三 こそを  
うれみづころ預言者ハあるさこよてたあそをる〜こをな



しとソビしよよる。五カリラヤよのころしよしよときガリラヤのひと  
びとかれを接しよそのころしよ節建のころしよ耶穌のエルサレム  
までおこあひしよまぐてのころしよをうねるもそのいぢしよしよ  
きてかれをみされをあり。哭耶穌まごカリラヤのカナしよしよ  
る。あしよまきよ水をさけしよせしよころしよちりしよときよ王の直  
臣その子やまひしよころしよまてカペナウんしよあまられば。七耶穌の  
ユダヤよりカリラヤしよまきてされるころしよ成長しよまなをむ。耶穌の  
ゆしよゆきてカペナウんしよころしよその子をしよいしよしよまもんこ  
とをまぐしよその死るをうりなるもくねばなり。八耶穌しよしよ  
いひしよしよなんぢら休徴ところしよちるわきをみばしよ信せしよ

四九うれしよしよしよしよ主よわが子のしよたむるさきよまらざりた  
ま。十耶穌しよしよしよしよ往なんぢの子しよいしよくるあり。その人  
いしよのしよしよしよしよ信しよてまらぬ。五ころしよるときその僕  
ともうれしよあひてつげしよしよしよなんぢの子しよいしよくるなり。こ  
れその愈しよしよしよしよ時しようれしよしよたぢねけまら。ころしよてまの  
ふひるの一時しよ熱しよあしよしよしよ父も耶穌のなんぢの  
子しよいしよくるありしよしよしよしよしよしよしよその時のおなりしよ  
ころしよをまきておのきしよその全家しよしよしよしよしよしよしよ信せしよ。五  
の第二次のころしよあしよしよしよしよ耶穌ユダヤよりカリラヤしよしよ  
まてなせしよしよしよ



第五章 そののちユダヤ人のいとむいありたれを耶穌エルサレム

よのち エルサレムの羊門のち エルサレムへブルのうへ エルサレムの  
てベテスダと エルサレム池あり。このつけよいつ エルサレムあり エルサレム  
か エルサレム病者め エルサレム跛者ま エルサレムおとろく エルサレムのなとおふく  
ふ エルサレムおて水のう エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
ま エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
し エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
た エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
その病のひさ エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
が エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく

それを扶て エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
他のひと エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
ま エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
よ エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
そ エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
ハ エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
比 エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
ら エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
よ エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく  
い エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく エルサレムおとろく



の人あそ〜ゆゑ耶穌さうけられをなすり 亦その後いはい聖殿  
までをけひく〜あひつひけるい視よかんちををよつえ  
まます罪咎をのけことすつれおそくをさきよまされる  
災禍かんちようらん 主それ人ゆきてユダヤびとよかの  
きといやせ〜ものい耶穌あそいつく 亦あふおつてユダヤ  
人いいれを窘迫てころさんとをころす。そのかきつてはこと  
致せりい安息日なるをわれをたす 主耶穌うれはようそくを  
るいわつて父をいぬよつてをまだらきさまよ 我もまこと  
はさうそなり 大それよよりてユダヤびとつよく 耶穌を  
ろさんとをかるぞんあんをくもちを犯すのそあは神

かのれがち〜ソひ已はうみとひと〜くまねをなすり 十九こ  
のゆゑは耶穌うれはよあそつてつひたるたまことよ誠よ  
あんぢらよつかん子各ちけおこなふことばみて行のな  
ういかなふ〜もおこなふことあそまびぞんをて父の  
おこなふことを子もま〜おこなふをあそ 二十ちハ子と愛  
〜もておのれのおこなふことあそ〜はうれよ示をな  
んぢらと〜あや〜めんためよ〜おとともよりさ  
らよ大あることばうれはあめさん 三そハちけ死〜は  
城よみ〜つてせてい〜むもつ〜とく子もおのれのお  
ころよあそ〜ひて人とい〜む〜 三それ父ハたれを



まさむのに審判さむはまぐて子こはゆるねり三これまぐて人ひととして父ちちはらうやまふごとく子こはもうやまふしめんがめたり子こと敬うやまつまぐるものへこれとほのませ父ちちとらまもいふまことよくなんぢらよつげんをうけなはと聴きわれはつのはせしものと信まをぶるものへ永生えいせいのたまはれ且かつさばきよいつくば死しよまいのちよろづきを五まことよくなんぢらよ吉きちんあるもの神かみの子こはあまはまきくときたらん。いまその時ときはるまき。されはまきくものちいと奪うばし六それ父ちちはみづうう生なまとたのてら。そのごとく子こはも賜たまてみらうういれち我われたものせしを七まこと人の子こらるよよろそこれよさ

なまきまるとは權威けんいとらまはる六これとあやしとまるとなうれ。その墓はかよとるもはまかそは聲こゑとききていつるうたきたらんうけまをあり元善よきはませしものへ生なまとらるよよみぐへ又また悪わるはなせしものへつみは得うよよみがくるべし三これあよごとくもみづうう行なまくとあさむだまきくとらるよたぐひて審判さむも。うがきはまきん公平こうへいその我われらうむねはおこたふよことはらりらめばつらひせし父ちちのむねをおこたふよことはらりらむねをなすり三もしわがごとくは我われらううあらしせむらうらうハ真まことあるべし三別わかれはわがごとくはあらしまらるのあらしられそのわがごとくをあらしまる證あかしのまこと



ある証しする 三 あんぢららさきに人をヨハネよつちをせし  
うれ真理のたけよあつしをなせ 言 されとされ人のあ  
しと 一 年 二 のこのころ証しあをなんぢらのまくとれん  
ごちあを 三 ヨハネを中もしてひうれる燈あり 四 かんぢら  
れんで暫それひうを証しする 五 われいヨハネよんお  
あいたるあつしあをそれは父のそれよ賜てなし 六 げしむる  
事よるをち 七 おこあふところれわさるあれ父のわれ証  
つちをせし 八 ことを 九 証しをなかり 十 うら我をつちをせし 十一  
もわつしと何かし 十二 せもかんぢらいまそその聲をきうべ  
いまそそれ形をみん 十三 それ道いかんぢらのあふるよとま

らさるまき。そんなんぢらそれつちをせしもの証信せざるよ  
よるそを 一 なるなり 二 なんぢら聖書ふうぎりあきいのち  
ありとおひてこれ証探索このせいしよをわれよつち  
あかし 三 するものなる 四 なんぢらわがゆふ生をえんがた  
めき 五 する証このま 六 されひとの榮証うけ 七 われあ  
ぢら証ある。なんぢら 八 そのあふるよ神をあいまるの愛あ  
らざるなり 九 われえわが父の名よよるまてき 十 するよなん  
ぢら我をう 十一 他 十二 のひとあは 十三 名よよるまてき 十四 する  
なんぢら 十五 証 十六 接 十七 かん 十八 あんぢら 十九 いた 二十 び 二十一 人 二十二 あ 二十三 ぐ 二十四 め 二十五 を  
うけて神 二十六 する 二十七 づ 二十八 榮 二十九 証 三十 も 三十一 め 三十二 ざる 三十三 も 三十四 の 三十五 なる 三十六 ふ 三十七 い 三十八 う 三十九 せ 四十 よ



く信ぢるころをえんや五なんぢら我ちよは訴うるものと  
わ我おもふあつれ。なんぢら我うつらあるものひとをあり  
即すちなんぢらつ時ときところのモーセあま四六モーセを信  
せをそれ我しんぢる。そはモーセわがころ我書かづればな  
ア四七モーセのあませしころ我志んせびばいころわが  
ひしあをを信せんや

第六章

このれち耶穌ガリラヤの湖うみまあるもちテベリアのみづう

みのむうく 濟たしよニおろくのひとぐうれよあさぐふ。そ  
ちうれがやみしれあせし休やすみとみしゆああり三耶  
穌やまよの初は門徒かとともんそのところよさせり四時とき候とき

ユダヤひとのまぎころの節ふしはちう五いゆは目をあげてお  
ろくの人のまきとれるとみてピリポよつひくるハ。つづこよ  
アパン我うひてうれよ食たむべき六みづうらそはあ  
さんとまきころ我ちれとうれを試あんぐすめよのくいつる  
なり七ピリポあつてくハ銀かね二百ひゃくのパンも人びとごとよまこ  
しづあつてな足たらざる一ハ門徒かのひとをまかをも  
シモンペテロは兄弟あンデレーいゆはよひんころハ九こ  
こにひとをの童子こどもあま。おるむきの餅ぱんいつとちひさき魚い  
あつら越こえてま。されどこのおろくの人びとよいこうよはげきぞ  
十 耶穌いひけるもひとぐ越こまわすせよ。そのところよおる



くの草あをとおよそ五千<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>あどまきりぬ 土<sup>ニ</sup>耶穌パン<sup>ヲ</sup>ばくとを  
祝謝<sup>ス</sup>て—とあてて門徒<sup>ニ</sup>こればまを—人<sup>ニ</sup>はあてよ。まて  
うくの—とてちひさき魚<sup>ヲ</sup>をもひらぐのこのみよ志  
とてひて—とれ—と與<sup>ス</sup>り 土<sup>ニ</sup>みか飽<sup>ス</sup>るはち耶穌<sup>ニ</sup>—とい  
ひらるはまこ—も—あをさぐるやうはそのあを—の屑<sup>ヲ</sup>ば  
ひろひあつめよ 土<sup>ニ</sup>うれうご食<sup>セ</sup>—うのいつれ麩<sup>ノ</sup>麥<sup>ノ</sup>のバ  
ンの餘遺<sup>ノ</sup>の—とばひろひあつめらねば十二<sup>ノ</sup>の筐<sup>ニ</sup>よみてを  
あひらぐ耶穌<sup>ノ</sup>のなせ—ある—とみてあをまことよ世<sup>ニ</sup>よき  
うまてき預言者<sup>ナリ</sup>なりといふ 土<sup>ニ</sup>こ—とおつて耶穌<sup>ニ</sup>うれうご  
まてをとおせとて王<sup>ニ</sup>よあさんときるは知<sup>ル</sup>てひとり

うて—とてさうな再<sup>シ</sup>やまよい—とて 土<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>の—とて—とる門徒<sup>ニ</sup>  
うみよとて—とて舟<sup>ニ</sup>はカペナウム<sup>ニ</sup>は向<sup>テ</sup>てうみへわたり  
既<sup>ニ</sup>はこれられども耶穌<sup>ニ</sup>うれうよき—とて大<sup>ニ</sup>狂風<sup>ニ</sup>あてよ  
まてや—と海<sup>ニ</sup>あれ—とて 土<sup>ニ</sup>一里<sup>ニ</sup>十町<sup>ニ</sup>を—とて—とて  
るとき耶穌<sup>ノ</sup>のうみはあのみらねよちつづき試<sup>シ</sup>みて門徒<sup>ニ</sup>  
ちおそそ—とて 土<sup>ニ</sup>耶穌<sup>ニ</sup>ひらるは—とてこれなを懼<sup>ル</sup>るなりぬ 土<sup>ニ</sup>ま  
こよおいて—とて—とてかき—とて舟<sup>ニ</sup>は—とて  
うちよそはゆるんと—とて—とての地<sup>ニ</sup>よつきぬ 〇 土<sup>ニ</sup>明日<sup>ノ</sup>  
たこのうみよ—とて—とて—とて門徒<sup>ノ</sup>の—とて舟<sup>ノ</sup>の—とて  
まの—とて—とて耶穌<sup>ニ</sup>まて—とて—とて—とて—とて門徒<sup>ニ</sup>



のみゆけるを<sup>三</sup>このときテペリヤよを<sup>三</sup>あつたのみぬきと  
ま<sup>三</sup>主のいのちを<sup>三</sup>てひとりぐは餅を<sup>三</sup>えはせしころあのおらぐは  
つけま<sup>三</sup>言ひとりぐ<sup>三</sup>耶穌のころは<sup>三</sup>あつた門徒も<sup>三</sup>まゝあつた  
をみてうれも舟は<sup>三</sup>おま<sup>三</sup>耶穌を<sup>三</sup>たら<sup>三</sup>福ん<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>カペナウム  
といふれま<sup>三</sup>湖のわつあ<sup>三</sup>てうれは<sup>三</sup>あひつひ<sup>三</sup>らるる<sup>三</sup>う<sup>三</sup>ビ  
何時ころは<sup>三</sup>まき<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>た<sup>三</sup>ゆひ<sup>三</sup>や<sup>三</sup>耶穌あ<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>つひ<sup>三</sup>らる<sup>三</sup>た  
誠ま<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>なる<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>つげん<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>と<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>ぬ  
るも休徴<sup>三</sup>は<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>パン<sup>三</sup>は<sup>三</sup>食<sup>三</sup>し<sup>三</sup>て<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>き<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>  
がゆ<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>の<sup>三</sup>糧<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>  
永生のころは<sup>三</sup>糧<sup>三</sup>を<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>人の子は<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>

勞べし。そは<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>の神うれは<sup>三</sup>印し<sup>三</sup>て<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>か<sup>三</sup>し<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>を<sup>三</sup>なり<sup>三</sup>六こ  
れは<sup>三</sup>よ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>て<sup>三</sup>ひとりぐ<sup>三</sup>耶穌は<sup>三</sup>い<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>ける<sup>三</sup>は<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>い<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>こと  
を<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>神の工は<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>や<sup>三</sup>元い<sup>三</sup>は<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>  
の<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>る<sup>三</sup>神のつ<sup>三</sup>つ<sup>三</sup>た<sup>三</sup>せ<sup>三</sup>し<sup>三</sup>もの<sup>三</sup>は<sup>三</sup>信<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>その  
わ<sup>三</sup>き<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>うれ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>い<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>る<sup>三</sup>を<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>を<sup>三</sup>て<sup>三</sup>なる<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>は<sup>三</sup>信<sup>三</sup>せ  
し<sup>三</sup>む<sup>三</sup>る<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>よ<sup>三</sup>なる<sup>三</sup>の<sup>三</sup>休徴<sup>三</sup>を<sup>三</sup>な<sup>三</sup>して<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>は<sup>三</sup>み<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>る<sup>三</sup>や<sup>三</sup>何の  
わ<sup>三</sup>き<sup>三</sup>は<sup>三</sup>お<sup>三</sup>こ<sup>三</sup>な<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>や<sup>三</sup>三<sup>三</sup>わ<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>る<sup>三</sup>の<sup>三</sup>せん<sup>三</sup>ぞ<sup>三</sup>野<sup>三</sup>を<sup>三</sup>マ<sup>三</sup>ナ<sup>三</sup>は<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>  
ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>天より<sup>三</sup>パン<sup>三</sup>を<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>食<sup>三</sup>し<sup>三</sup>む<sup>三</sup>と<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>  
か<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>三<sup>三</sup>耶穌の<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>る<sup>三</sup>は<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>なる<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>は<sup>三</sup>つ<sup>三</sup>げん  
天より<sup>三</sup>パン<sup>三</sup>を<sup>三</sup>なる<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>は<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>ころは<sup>三</sup>の<sup>三</sup>も<sup>三</sup>モ<sup>三</sup>ー<sup>三</sup>セ<sup>三</sup>は<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>つた<sup>三</sup>



今わがちハ天より眞のパンをめてなんぢらよあそび  
神のパンも天よりとゞりて生命とよふあそびあるものなり  
言うれらつひ々るハ主よつねよその餅をわれよあそび  
よ 三三 耶穌のひるもわれハいのちのパンなり我よきこ  
もはとうるをわれ信ぢるものをつねよ渴くことなり 三六  
れど我なんぢらにわれ信ぢても信ぜざることわれなんぢら  
よつげたりき 三三 きて父のわれよあそびのものえ我よき  
とらん。それよきこものハわれらなるはあそびきて  
わが天よりとゞりハいのちのわれらなるはあそびと行ん  
よあそびわれ信つてのせよもの意のまことおこるん

とめなり 三九 きて父のわれよあそびのものわれは一  
うしあまに末日はこれとよみうくらにを即ちわきとつら  
をせー父のわれなる 四一 やおよそ子信みよこれ信ぢ  
ものハうぎりなきいのちを得それまことい聖の日はこれ  
彼よみうくらにわれハ。うきわきとつのはせーもの意なる  
むなり 四二 においユダヤびら 耶穌のわれハ天より  
とゞり餅ありといひーこよつきつふやき 四三 いひ  
るハわれが父母ハわれらの識とくらなるもやまらるも  
れそヨセフの子いひはよあそびや。あつるよなんぞわれハ  
天よりとゞりーとつみや 四四 耶穌うそつていひける者あ



ちうちうひは譏うくなくれ 聖 さればつのもせー父もーひ  
かざれむ人よくすれよきううな 我よきうもーひと未  
日よまれこれ故よみううはぶー 聖 ようげんーやの書よひ  
とみかをーへと神ようげんとあるされたり。このゆゑよま  
べて父よりきうて學ーものいわれよきたる 聖 されと父は  
みーものいなり。 神よりきうてもものおみこれとみうを  
聖 誠よまうとよわれなんぢらよつらん。されば信まるもの  
をかぎりなきいのちある 聖 されん生命のパンを 聖 せん  
ぢらのせんぞハ野よてマナをうらひーうと死を 聖 まで  
くらよものをーてあるさうーむるものハ天よをううれる

餅あり 聖 されも天よをううとーいけるパンなるもー人こ  
のパンをうらむもかきをあくと登ー我あうあるパンと  
わが肉なるよの生命のうめにわれこれ故あせん 聖 ころ  
よエダヤびどたうひよあうそひしひけるハ人いこうで  
その肉をわれうよあうてうらハーむるころ故えんや 聖  
耶穌いひくるハまうとみくせんぢらよつらんもー人の子  
のにくとうらむぎその血とのまされハなんぢらよいのち  
をー 聖 わが肉なるハ血とのむものハ永生あり。われを  
まその日よこれ故よみうらぶー 聖 されわが肉ハまこ  
とのうひものまうわが血ハまことれおみものなり 聖 ころ



にくせららひまがち飲のむものたまれよをたまれもまゝの  
れよ居すまつける父ちちわれ候あつゝをま。ちよよよりてわがけ  
るごとく我われをくらふものもわれよよりて生なべー 我われこれ天てん  
よりくらされるパンあり。あんぢらの先祖せんぞくららひられとな  
ほ死し—マナのごときものふあらばこの餅もちをくらふきのの  
うきりなくいくばう 我われこれらのことをも 耶い蘇しよカペナウムの會かい  
堂どうよそを—候あなせるときつひ—ところを 卒そ門もん徒たども  
のうちあふくの人ひとこれ候あきしてつひけるハ此こゝハはなまご  
—きことむなを誰たれらよよくこれ候あきかんや 卒そ門もん徒たのこはこ  
とにつらきつあやく候あ 耶い蘇しよみづからをまてこれらよつひ

けるハ。この言ことばよよりてつまづくら 卒そ門もん徒たのこはもと此  
ところよ升あがをみばつゝよ 卒そ門もん徒たのこは靈たまあり肉にく  
たまきなし。まがなんぢらよつひ—あをみらぬなり生いのち命めい  
たうを 益えきされどなんぢらのうちよ信まことせざるものあをそれ 耶い蘇しよ  
のこくつくるハあんぜざるものハ誰たれかのれとくらんも  
のいされとつゝ—こを候あちよりあれバなり 卒そ門もん徒たのこは  
つひけるハ。このゆゑよ我われさまよこを父ちちあてにされバ人ひとよ  
くらまよきくらものあ—といひ—なを 卒そ門もん徒たのこは  
徒たあふく—つゝをま 耶い蘇しよとともにあふくさりき 卒そ門もん徒た  
によらまてい 卒そ門もん徒たのこは—よつひくらハなんぢらもま



さらんとおもふや 六 シモンペテロこころなるい主よわれら  
へされまゆらんや永生えいせいのこころをばめたるものいなんぢら  
ま亮あさわわれら信しんじてある。なんぢらいつる神の子キリスト  
なり 七十 耶穌いほそうれしよあそくくるい。まほなんぢら十二人と  
えしびしよあしびやされどそのうちひとらい悪魔あり  
七 ありシモンの子イスカリオテのユダをさしりくるなり。  
うれし十二じふにのひとりよしとて 耶穌いほそとわさるとまざるそのあ  
ま  
【第七章】このころのれち耶穌いほそカリラヤと居めたりユダヤのう  
ち被めたるころにはこのまざりき。そもユダヤびとくれは殺ころ

んとちかれをなり 二 さてユダヤびとの構かみ廬のいをひちる  
づけま 三 こころよおいて耶穌いほそのまやうさいうれしよいひくる  
をなんぢの行かみところのわざを門徒かみうちよみせんがためま  
らばさるてユダヤよゆけ 四 そをかのれと顯あさんとししてひ  
その事こととなんものあしび。なんぢこれらのまざればおたる  
まよかのれと世よ顯あよこれその兄弟あなもるやうれは信しんせざ  
るがゆ急いそなり 六 耶穌いほそうれしよいひけるいわが時ときいまざい  
たうに。なんぢらのとまら恒とこよそあをれま 七 世よえなんぢら  
とあむむことあそをばわれと惡にくむ。そのうれらおとなす  
ところいあしとわれ證あまねをなり 八 なんぢらこの節ふしよ



の預れまゝの時いまだソコに居るがわれ今このいとむひよの  
がらト九のくひひてガリラヤよとまねを十その兄弟のゆ  
きーのち耶穌もあらたあらびしてひそらよ節よのち土  
いとむひのときユダヤびと耶穌をくらねてソひらるはうれ  
むいづくはあやや士衆人のうちよてうれよつきさるぬくの  
うらげソひあらそくを或もうれを善人ありといひあるひ  
とらいな民とまともひものなりといふ士されどもユダヤ  
びとと懼るよよりてあらはようまごごとげソひ人なり○  
あいとむひのあつたころ耶穌みやよのありて教誨をれば士  
ユダヤびとこれをあやしみソひけるはこの人のソまごま

あびたのちよて書をしるや士六耶穌うまごまごてい  
ひけるはまごをしあるところはいわが城よあはれ我を  
つらむせしものをしなり士七人ゆいねをつらむせし  
もの言はあごもこのまごの神よりのづるのまご  
おのれよよまてソひなるうをまごべー士八おのれよよりて  
ソひものおのれのをまれを求るありおのれ城つらむせ  
しもの榮をもむるもの真ありその衷は不義あり士九  
モーセなんぢらよ律法はあごしよあはむやされとあん  
ぢらのうちよこれを守ものありなんぢらなふあ急われ  
をころさんと謀や士十ひとごころてソひらるはなんぢ鬼



よつづれとて。さればなんぢは殺さるべしとて。なんぢらんや 三 耶穌  
らとて。うれしむらよひひけるは。これさきよ一事成るせよ  
かんぢららむ奇とせよ 三 モーセかんぢらら割禮をさぐる  
ハそのおのきよをいせよ。あらば。列祖よりいでよ  
のさきよ。ゆゑなり。これよよをて。なんぢら割禮をあんそく  
よちおおこちよ 三 人よ。モーセのおきてをやあきらまん  
づつち安息日よ。うらまひをうらむるときは。何ぞもがあんそ  
くよちよ。ひとの全身をいやせよ。ことば。いゆるや 二 外貌よ  
よ。是非をさぐる。ことあつれ義をもてさぐるよ 三 此  
のとて。エルサレムのある人。いひく。こゝにひとりぐのころさ

んと。ちつものよ。あつげや 二 今うれあらまよひよ。あつ  
て。こゝととつむるものあり。有司うちわつれ。成まことよ  
キリストなりと。知ならん。三 されど。わねら。この人のつづ  
ことり。きつり。張ある。四 一。キリストのきつらん。とき。誰も  
その何處より。きつるを。しるもの。あつらん 六 一。此とき。耶穌  
も。やめて。せし。大聲よ。よびひける。ハ。なんぢら  
それ。我を。まじ。わづの。ほこ。より。來成。ある。されど。我をおの  
む。よ。と。まて。きつる。よ。あつげ。それ。成つ。つ。を。せよ。ハ。眞  
た。も。む。あて。なんぢら。の。し。ら。ざる。と。ころ。なり 九 一。わね。ハ。か  
を。知。そ。ち。それ。ハ。うれ。よ。を。出。うれ。ハ。わね。成つ。つ。を。せよ。



のあれがなり 三 ころよおいてうねる 耶穌とららくんとは  
かきり。されどその時いきさついたらささるゆゑは手だてを  
するものなりき 三 民のうちおるくの人 うれは信トひん  
るへキリストのきこらん時そのたはとらるの休徴このひと  
よりおるころんや 三 パリサイの人たみとも 耶穌よつきて  
ころよおいてよかきそあはは 聞かむも 祭司のたささる  
パリサイのひととてうれはとららくんとて下吏とつのもせり 三  
ころよおいて 耶穌のひんたるはそれるをばらくるんちら  
とせよに在るころのちうれをつのもせよのものよゆうん  
三 ちんちん 我をころぬるともあはは ころよおいてころよおいて

ろへあんちらきこるころあははきこる 三 五 エダヤ人あひ  
たごひよひくもわれらの遇さらんころよおいてころよおいて  
ころよおいてころよおいて 三 六 彼がかりてちんちんそれ  
のんちをころんとまるや 三 七 彼がかりてちんちんそれ  
尋ともあははころよおいて 我をころころくちんちんきこる  
ころあははきこるころよおいて 三 八 言はたふぞや 三 九 言はたふ  
ころよおいての大日はいかに立てよむころよおいて 三 十 言はたふ  
わつばわれよきころよおいて 三 十一 言はたふころよおいて 三 十二  
あははころよおいてころよおいて 三 十三 言はたふころよおいて 三 十四  
ころよおいてころよおいて 三 十五 言はたふころよおいて 三 十六  
ころよおいてころよおいて 三 十七 言はたふころよおいて 三 十八  
ころよおいてころよおいて 三 十九 言はたふころよおいて 三 二十



靈みたま被かさせるなり。そのハ耶穌イエスいまご榮光をうけざるよよりてみ  
つぬらまごころからさればなり。 甲 民たみのうちよみておろくの人  
このころを被かきつて。このまことように預言者イザヤありとつひ  
 四 あらひハこれハキリストなりといひ。あらひハキリス  
ガリラヤよりつづぐけんや 三 聖書せいしょハキリストをダビデのまこと  
よてダビデのまこと 郷きょうベツレヘムよりいでんとあるせい。あまご  
やとつひ 三 まつよおいて民たみともうねよつきてあまをひわ  
うれたり 四 それあつよこれ執とくんとするものもあまこれ  
と手てごせいものちつりき 五 下吏したうぢともさしーの長ながとパリ  
サイの人ひととちのものにかくりたればうねら下吏したうぢよひひけ

るハなんぞうれと曳ひきつらざるや 哭なみだ あまやく答こたていひけ  
るハいまごこの人ひとのごころのひーひとあま 四 パリサイの  
ひとつひたるハなんぢらもまご感あはされー 哭なみだ 有司うぢまごパ  
リサイのひとのうちよこれ被か信まするものあらんや 哭なみだ 律法りつぽう  
とあらざるこのおろくのひとの罰ちがひまきまされかな 手て それ  
うちの一ひと人ひとよを夜よい 五 ぬんよまきつらーニコデモとつづもこれ  
うねらよつひけるハ 五 それ人ひとよまきつらその行なをーらざる  
さきよその罪つみをさごむるハわれらの律法りつぽうならんや 五 うね  
ららるつてつひたるハ爾なんもまごガリラヤよりいでーもこれ  
なるの考かんがえよよあげんとヤハガリラヤよりいづることなり



五  
こゝよおいそおのく家ようられま

第八章 いほを橄欖山よゆたりニよおあたるころまの聖殿

よのまらるるの民もなうれよきさうりなればまわをてかどら  
ばとふ三 こゝよ奸淫おこなくるときとらへしきし婦  
ありたるものがくーやとパリサイの人られと耶穌のましよつ  
まきさうり 群集のあゝよおきつひけるが 四 師よあはれんを  
ハ奸淫おこなひをさるるとき執られしものなるを 五 のくれ  
ごときものを石よてうちあはきとーとモーセ律法のうち  
よ命トうり。なんちハつゝよのや 六 のくつゝを耶穌と  
らゝるて 証のう移をひきつゝさんとおもくゝるなり。いほ

ま身とかどめゆひよて地よもれうたを 七 うれくが志きり  
よらあよより 耶穌おきてこれよつひたる者なんちらのう  
ち罪なきものまづうれをいーよて 撃ちしつひハまの身  
哉か 八 めてちよ晝 九 うれらこれとききてその良心よせ

められやしよりばとめわつときものまでひとくよので  
ゆきと 耶穌ひとりころる。なんちハあつまをれなうよこ  
てま 十 いほを起てなんちよつひたるハ婦よなんちばうつ  
くーものまらるるゆきーや。なんちの罪をささむも  
のあきと 十一 なんちつひけるハ主よたれもあー耶穌うれよ  
つひたるハわれもなんちのほみと定む。ゆきをあつゝひ罪



証せしむるあり。○ 耶穌まことひらくは、この世をひらくる  
もそれハ世のひらくなり。われは、あまのひらきな  
かもあるうに生ひけるひらきとらなり。 十三  
カイの人ひひけるハ、なんぢのみづうおのれの證を  
まかちのみあつても眞ならず。 十四  
耶穌まことひらくは、  
われみづうハ、巴のあつても、まこと證はまことあり。そ  
ハわれづらよりききても、何處へ申くと、われハなり。あんぢ  
ら、まづづらより來づらと、去れしらざるなり。 十五  
あんぢ  
らハ、肉よりて人のつみは、さざるむ。それハ、ひらきは罪とささ  
め。 十六  
耶穌まことひらくは、  
定めわづらざるむと、まこと眞なり。そのわ

せひたりあるま、あまは、我をつつとせし、父ともにあれを  
なり。 十七  
二人のあつても、まことなりと、なんぢらのおきて  
あるさるなり。 十八  
まことの證は、まことハ、それなをわれを遣せ  
し、ちくもまことわづらざるなり。 十九  
われらひらくるは、  
あんぢれ父のつらまあるや、耶穌まことハ、なるもあんぢら  
をわれは、あまは、我ち、まことさるあり。 二十  
われを  
識するは、あまは、わづらざるなり。 二十一  
耶穌まことハ、  
この世をみやの中、さいせんのも、こゝに、あまは、まこと  
まこと、れと、この世の時、まこと、つらざるは、われも、手は、つら  
ま、この世、つらき。 二十二  
耶穌まことハ、ひらくるは、それ往ん、あんぢら



われは尋べ—なんぢらおのれは罪よ—あんもぐやくとこ  
ろいついなんぢらきこつことあたまさざるあり 三 うれよきり  
てユダヤびとつひけきんわが往とろくあんぢらきこつ  
うとあたまべとつひき。うれの自殺せんとききこの 三 耶穌の  
れよよつひきるいあんぢらも下よきのでききの上よりい  
づ。なんぢらこの世よきつでそれこの世よりので終 二四  
このやあよなんぢらのおれ達のつみよ死んとそれつひ—  
なり。あんぢらも—それの彼なるを—んせきのおのれの罪  
よああん 五 うれつひきるいなんぢらされるや 耶穌の  
ひきるいそれの實よわがあんぢらよつたるところのもの

たり 六 それあんぢらよつきてうきよ—罪をささ  
むべきこと多端あり。それをつうをせ—もの、真あり。うれ  
よき—こゝにわれ世よつて—この父はさ—つくとあ  
れどうれらあきさき 六 このはあよ 耶穌うれよつひ  
きるいなんぢら人の子とあげ—のち我のうれきるいあ  
ま—わがみづううなあご—ともあきん。わが父の—  
つよあごつひてうれらのこととつうをあよ— 元 うれ  
れつういせ—もの我と—にあり。ちくとそれはいとま  
きたちをい。そんわれ恒ようれの—あるよちよ—は  
らあんをなり 三 耶穌この—はいつうときわく人ら



れはしんせき<sup>三</sup> 耶穌<sup>イシュ</sup>おのれは信ぜ<sup>ユダヤ</sup>ひとよソひけ  
 るもたうんちら<sup>申</sup> わづこころを<sup>居</sup>バまことにかわがで<sup>一</sup>を  
 ぞ<sup>三</sup>うらまこと<sup>一</sup>はしらん<sup>真理</sup>ハかんちらよ自由とえさ<sup>ハ</sup>  
 べ<sup>一</sup>三<sup>三</sup>うれ<sup>申</sup>あ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>マ<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>ブラ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>あり  
 いま<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>とは<sup>ハ</sup>奴<sup>ハ</sup>隷<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>なり<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>自由<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>え  
 さ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>爾<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ころ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup> 言<sup>ハ</sup> 耶穌<sup>イシュ</sup>う<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>よ  
 ソ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>かん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>悪<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>こ  
 ろ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>奴<sup>ハ</sup>隷<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup> 言<sup>ハ</sup> せ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>家<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ん  
 子<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>居<sup>ハ</sup>三<sup>三</sup>この<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>自由<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>  
 へ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>誠<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup> 七<sup>七</sup>わ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>

ア<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>。され<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>それ<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>さんと<sup>ハ</sup>謀<sup>ハ</sup>を  
 ハ<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>ぐ<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ころ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>衷<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ざ<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>バ<sup>ハ</sup>なり<sup>ハ</sup> 元<sup>元</sup>それ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ  
 づ<sup>ハ</sup>父<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>とも<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ころ<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>ソ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>。なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら  
 の<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>とも<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ころ<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>ふ 元<sup>元</sup>う<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ころ<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>  
 耶<sup>イ</sup>穌<sup>シュ</sup>よ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup> ア<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り 耶<sup>イ</sup>穌<sup>シュ</sup>ソ<sup>ハ</sup>ひ  
 け<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>  
 お<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>べ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup> 早<sup>早</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>いま<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup> 眞<sup>真</sup>理<sup>理</sup>  
 と<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>哉<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>さんと<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>これ<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>わ<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>よ  
 あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup> 爾<sup>爾</sup>儕<sup>儕</sup>ハ<sup>ハ</sup>なん<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>父<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>え<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>なり<sup>ハ</sup>。う<sup>ハ</sup>れ  
 ら<sup>ハ</sup>ソ<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>奸<sup>奸</sup>淫<sup>淫</sup>よ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>ぞ<sup>ハ</sup>只<sup>只</sup>ひと<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>の



ちてあまをきゑるもち神あり 四 いはまうれはよりひたるハ神  
とてなんぢらの父あはたなんぢらわれと愛まへり。されハ  
神よりいせしきてわれはたをぞれしむ。おのれよりいせしき  
とてはあはれ神われははつちてまへり 三 なんぢら  
あんでわがりし言をまへざるや。そはわがまへるときはこ  
とを得ざるはなり 四 なんぢらの父あはまより出まへその  
ちの慈愛おこすはこころをこめむ。うれはまへより人を  
ころはまのなりまへ真理よとらへ。そはうれの衷よまこと  
るたれをなり。これぞ誑とていふまへおのれよりいせしき  
りあはる。そはうれハ誑者まへり。たをまへり。父あはればな

五 われ真理をりよよりてなんぢらわれをしんぜは 四  
なんぢらのうち誰ハわれをつみよさざるものあるや。わ  
れなんぢらよまこととていせしきまへ申えられと信ぜざる  
ら 聖神よりいせしものハのみのことをもは聴なんぢらのき  
らざるハ神よりいせざるよりてあり 四 エダヤ人こそ  
ていひけるハなんぢらサマリアのひとよて鬼ははれしき  
もはあまをわれらがつくるハ宜あはるや 四 耶穌こそて  
いひけるハそれハかによつてきこるものはあはれわれハ  
わが父をたやとびなんぢらわれはうらんまへなり 五  
れハみらうらの榮とてまへこれと求む罪とてささむる



とてわれはどの有り <sup>五</sup> われまことよ 誠 <sup>まこと</sup>よなんぢらよつぐん  
人 <sup>ひと</sup>もーわがこころをまもるバ <sup>バ</sup>のぎりなく死 <sup>し</sup>をみざる者  
 <sup>五</sup> エ <sup>エ</sup>ダヤ <sup>ダ</sup>びと <sup>び</sup>と 彼 <sup>かれ</sup>よひ <sup>ひ</sup>たる <sup>た</sup>る <sup>る</sup> <sup>い</sup>ひ <sup>ま</sup>われ <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>な</sup>ん <sup>ぢ</sup> <sup>が</sup> <sup>鬼</sup> <sup>ま</sup> <sup>よ</sup> <sup>つ</sup>  
 <sup>五</sup> <sup>つ</sup> <sup>ぎ</sup> <sup>る</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>を</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup> <sup>ま</sup> <sup>で</sup> <sup>よ</sup> <sup>死</sup> <sup>ま</sup> <sup>す</sup> <sup>預</sup> <sup>言</sup> <sup>者</sup> <sup>も</sup>  
 <sup>あ</sup> <sup>ね</sup> <sup>を</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>る</sup> <sup>よ</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>云</sup> <sup>ひ</sup> <sup>と</sup> <sup>も</sup> <sup>一</sup> <sup>つ</sup> <sup>の</sup> <sup>こ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>を</sup> <sup>ま</sup> <sup>も</sup> <sup>る</sup> <sup>バ</sup>  
 <sup>う</sup> <sup>ぎ</sup> <sup>り</sup> <sup>な</sup> <sup>く</sup> <sup>死</sup> <sup>ト</sup> <sup>と</sup> <sup>五</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>の</sup> <sup>わ</sup> <sup>れ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>先</sup> <sup>祖</sup> <sup>ア</sup> <sup>ブ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup> <sup>の</sup> <sup>う</sup> <sup>り</sup>  
 <sup>も</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>ら</sup> <sup>れ</sup> <sup>る</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ん</sup> <sup>や</sup> <sup>ア</sup> <sup>ブ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup> <sup>ま</sup> <sup>で</sup> <sup>よ</sup> <sup>死</sup> <sup>う</sup> <sup>ぐ</sup> <sup>ん</sup> <sup>ー</sup> <sup>や</sup> <sup>と</sup>  
 <sup>ち</sup> <sup>も</sup> <sup>ー</sup> <sup>ね</sup> <sup>を</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>み</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>ら</sup> <sup>と</sup> <sup>誰</sup> <sup>と</sup> <sup>ま</sup> <sup>る</sup> <sup>の</sup> <sup>五</sup> <sup>耶</sup> <sup>蘇</sup> <sup>こ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>と</sup> <sup>く</sup> <sup>ら</sup>  
 <sup>る</sup> <sup>ハ</sup> <sup>わ</sup> <sup>れ</sup> <sup>も</sup> <sup>ー</sup> <sup>み</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>ら</sup> <sup>あ</sup> <sup>が</sup> <sup>り</sup> <sup>我</sup> <sup>あ</sup> <sup>き</sup> <sup>な</sup> <sup>わ</sup> <sup>ら</sup> <sup>る</sup> <sup>榮</sup> <sup>を</sup> <sup>む</sup> <sup>ま</sup> <sup>ー</sup> <sup>我</sup>  
 <sup>張</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>む</sup> <sup>ち</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>を</sup> <sup>わ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ぶ</sup> <sup>父</sup> <sup>ま</sup> <sup>あ</sup> <sup>を</sup> <sup>も</sup> <sup>ち</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>ま</sup> <sup>の</sup> <sup>神</sup> <sup>と</sup> <sup>と</sup>

か <sup>か</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>と</sup> <sup>こ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>の</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>を</sup> <sup>五</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>わ</sup> <sup>れ</sup> <sup>を</sup> <sup>ー</sup> <sup>ら</sup> <sup>に</sup> <sup>ま</sup> <sup>れ</sup>  
 <sup>そ</sup> <sup>の</sup> <sup>れ</sup> <sup>を</sup> <sup>識</sup> <sup>わ</sup> <sup>れ</sup> <sup>も</sup> <sup>ー</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>は</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>じ</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>も</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>こ</sup>  
 <sup>と</sup> <sup>き</sup> <sup>証</sup> <sup>者</sup> <sup>と</sup> <sup>な</sup> <sup>ら</sup> <sup>ん</sup> <sup>さ</sup> <sup>き</sup> <sup>を</sup> <sup>ま</sup> <sup>ね</sup> <sup>の</sup> <sup>う</sup> <sup>ま</sup> <sup>を</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>さ</sup> <sup>る</sup> <sup>道</sup> <sup>と</sup>  
 <sup>ま</sup> <sup>も</sup> <sup>る</sup> <sup>な</sup> <sup>り</sup> <sup>五</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>せ</sup> <sup>ん</sup> <sup>を</sup> <sup>ア</sup> <sup>ブ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup> <sup>の</sup> <sup>日</sup> <sup>と</sup> <sup>み</sup>  
 <sup>ん</sup> <sup>こ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>を</sup> <sup>喜</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>は</sup> <sup>み</sup> <sup>や</sup> <sup>の</sup> <sup>ー</sup> <sup>り</sup> <sup>五</sup> <sup>エ</sup> <sup>ダ</sup> <sup>ヤ</sup> <sup>ビ</sup> <sup>と</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup>  
 <sup>よ</sup> <sup>い</sup> <sup>ひ</sup> <sup>た</sup> <sup>る</sup> <sup>ハ</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>五</sup> <sup>十</sup> <sup>よ</sup> <sup>も</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>さ</sup> <sup>る</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ア</sup> <sup>ブ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup>  
 <sup>を</sup> <sup>み</sup> <sup>ー</sup> <sup>や</sup> <sup>五</sup> <sup>耶</sup> <sup>蘇</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ふ</sup> <sup>い</sup> <sup>ひ</sup> <sup>け</sup> <sup>る</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ま</sup> <sup>と</sup> <sup>よ</sup> <sup>く</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ぢ</sup> <sup>ら</sup>  
 <sup>よ</sup> <sup>つ</sup> <sup>ぐ</sup> <sup>ん</sup> <sup>我</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ア</sup> <sup>ブ</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ハ</sup> <sup>ム</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>さ</sup> <sup>り</sup> <sup>ー</sup> <sup>さ</sup> <sup>き</sup> <sup>よ</sup> <sup>り</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>り</sup>  
 <sup>五</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>よ</sup> <sup>か</sup> <sup>い</sup> <sup>て</sup> <sup>ひ</sup> <sup>と</sup> <sup>く</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>は</sup> <sup>撃</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>て</sup> <sup>石</sup> <sup>と</sup> <sup>ら</sup> <sup>れ</sup> <sup>を</sup> <sup>耶</sup> <sup>蘇</sup> <sup>ら</sup>  
 <sup>と</sup> <sup>れ</sup> <sup>て</sup> <sup>そ</sup> <sup>の</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>さ</sup> <sup>る</sup> <sup>を</sup> <sup>聖</sup> <sup>殿</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>で</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>け</sup> <sup>る</sup>



第九章 耶穌ゆくときうまれつきある替換みーごその門徒

うねまたづねてつひたるハラビこのひとをゆめ〜ひと生一  
たそれの罪なるや。おのねよよるま〜二親よよるもの 三耶  
蘇こ〜くたるハこのひとをつみよあらば亦そふふさおや  
の罪よもあらばうねよよるまて神のわざをあらたれん〜め  
なり 四晝のうちいられうあ〜ば我をつ〜せ〜その〜こ  
ぎ候あまぐきかなる夜き〜らんそのとき誰も〜が候あはこ  
とあ〜をいん 五われ世よとるうちよの光あり 六このこと  
とつひて地よつづき〜唾よてつら候ときそれ泥をぬ〜ひ  
の目よぬを〜うねよつひたるハシロアムの池よゆきてあら

へ。うねまるらちゆきてあらひ目みることをえてか〜を  
シロアムあれを譯をつ〜はされ〜ものとは義あり 八隣  
ひとぐおよび素よるうねの乞食を〜とみ〜ものともい  
ひたる者〜たまわ〜てものをこ〜ひ〜人あらばや〜あるひ  
と〜うねあま〜といひ。あるひとを似〜なるなりといふ。うねい  
ひけるハ我も〜うねあり 十うねらつひたるハぢんぢの目を  
い〜よ〜てあき〜るや 十一う〜てつひたるハ 耶穌とつよ  
ひと土をとときわがめよぬりてつよシロアムのつけよゆきて  
洗と。われゆきてあらひければ目みる〜と候え〜り 十二ひと  
びと〜うねよつひたる者〜うねハつづ〜よとるや〜う〜て志



らばとりよ三うねるこの誓ちかなりーものをパリサイのひとに  
もとよひきりしれそ四つちばなをきて耶穌いしすうねる目をあけ  
し目めのあんそくもちありき五パリサイれひとと彼かれよとひけ  
るいなんちのめいひのよしてあきくるや答こたへるはうれと  
ろ紙かみをよめよ置おかれそれをおひて見みころばえさうり六あ  
るパリサイのひとひけるはこの人ひとあんそくもちをまもる  
ざるがゆゑよ神かみよりいでーはあうばあるひとひけるは  
罪人つみびとのうでうけるあるーをおこすふことば得えんや。こゝよ  
おいてうねるあうそひわつさうり七復かへめしひよひひる  
いなんちの目め張はあうーよよりなんぢうれのうとをあうと

いよや。こゝろくるをうきも預言者よげんしやるり八ユダヤひとうれ  
のめあひありーよ見みうるやうあまーころとその二親ふたごをよ  
びきころまをの信しんぜばまふもちあうおやとよびきころりて  
あれよとひくるもこの人ひとをめーひもてうまれーとりよと  
ころれなんぢらの子こなるのいましつゝましてみるころばえ  
ころや九二親ふたごうねらよこたくくるはこれハわが子こなると  
うまれつきの誓ちかあると張はある三それと今いまいころりてめあ  
きよなりーのそれらきとーらば亦またそのめをあけーハ誰たれか  
るのそーらば。うねハおとなあり彼かれよくらねようれみら  
らりよ一〇二親ふたごのころのひーをユダヤひと張はおそれー



よする。その耶穌イェズはキリストといひあつたものありは會堂カイドウよ  
るいざまづとユダヤびとたがひよといひさざめをな  
る三あまれは神カミを歸せよとわれは年長オトコなりうきよとつねよといひ  
このゆゑなり四めいひなきもの返まよひていひん  
るい。あまれは神カミを歸せよとわれは人のつみびとなる  
とある五うれしくするはつみびとあるや否イナそれら返  
しらに我われはめいひなきものつまめあきよなれるまの一事コト  
返する六うれしくするはつみびとあるは爾オノはなにをかせ  
やといふてなんぢは目メを返あけやモとくけりはわれ  
まよななんぢらよといひよなんぢらきかを何故ナニあつてび

きかんとまよひのなんぢらもその門徒カドにならんとおもあや  
えうれしくするをいひたるはなんぢらの人のでいられ  
らにモーセの門徒カドなり元神カミのモーセよかたりていひわ  
れはわれを。されど人のつみよきまされしをわれ  
らもいひて三そのひとくくたるは此コもあやまきくとな  
る。われまよわの目をあけよそのつみよきまされし  
我なんぢらあつたといふ三神カミもつみびとよきかぞ。されど  
神カミはうまひてその旨ミコトよあまがものよを聽ミたまふとわ  
れらにある三世ヨのもつめよりこのつみよきまされしを  
者のめをあけいひとあま返カミきかぞ三とてこのひと神カミより



いできがなまよごとくもなすいそごもるづー<sup>三</sup>うれうこつて  
ひひけるハなんちもこつてく罪孽<sup>ツミ</sup>はうまれーものあふに  
反てまねら我をーあるこ。つひようれ我あひりせり<sup>三五</sup>  
れらの逐<sup>お</sup>りせーこと我き<sup>三</sup>耶穌<sup>い</sup>とつねてうれよあひい  
ひけるハなんち神の子とんむるこ<sup>三六</sup>こつてりひらる  
ハ主ようれとてわづ信むべきものハそれあるや<sup>三七</sup>耶穌<sup>い</sup>  
いひらるもなんちまきまようれとみる今なんちともめり  
ものハそれあり<sup>三八</sup>主ようれしんむとりひてうれ我拜せり  
<sup>三九</sup>耶穌<sup>い</sup>いひらるもまねささきせんうめよ世よまきこる。まら  
ちちみえさるものぞー見<sup>四〇</sup>みゆるものとこつてめーひ

となすーむ<sup>早</sup>耶穌<sup>い</sup>とそもにぞー<sup>一</sup>パリサイのひとこのこ  
とぞ我聞<sup>き</sup>てうれよひけるハまきらまめーひあふ<sup>二</sup>耶  
穌<sup>い</sup>うまよひひけるハなんちらもーめーひあふバ罪<sup>三</sup>あ  
るづー。されどいまわき見<sup>四</sup>とりひーよよりてなんちらの  
つみんをこれを

第十章

まことみくなんちらよつげん羊牢<sup>い</sup>よりるよ門<sup>一</sup>より  
せにしてほかよそあゆるものも竊賊<sup>ぬ</sup>あり強盜<sup>か</sup>あり<sup>二</sup>もん  
よりりるものハそのひつ<sup>三</sup>の牧者<sup>ぼ</sup>あり<sup>三</sup>かどもらるうれ  
のうめふひらき羊<sup>い</sup>ハそのこゑをきこ。つきおれれのひつ<sup>四</sup>  
の名<sup>な</sup>張<sup>は</sup>よびてうれ我ひきつげん<sup>四</sup>うれその羊<sup>い</sup>とひきつ



けるとき先よゆくあり。ひつとうれのこゑとあまてうれよ従  
 五 ひつとを別人よあまごりばくして避そふあつもの  
 此こゑとしらざればなり 六 耶穌うれよこの譬とつこの  
 れらハそのかゝれるところの意をあらざりき 七  
 この由よ 耶穌まごうれよひけるハまごといくあん  
 ぢらよつげんわれハまごハちひつとの門ありハまごてこ  
 れよりさだよきよりものハねびとなり強盗なり。ひつ  
 トそのこゑはきこりき 九 我ももんあり。も一ひとそれよ  
 りつらハまごをれつ出入をなして草をうぐ一 ねび  
 とのきこるハぬきまんとい殺さんと一ほろおさんとまご

のほあか。わがきこるハひつとをいのちと得うらゆ  
 たらあらしめんうめなり 十 それハ善ひつとひあり。よき  
 ひつとひハ羊のためよいのちと捐 十一 ひつとひよあま  
 けおのうひつとをいハ只やとまれてひつとをまもるを  
 のハ狼のきこるはみねハひつとをまて、逃おほうみひら  
 ト候をひてうれをちうけ 十二 雇工のおらるハやとられ一  
 りのあねハその羊をいハまごるよよりてあり 十三 それハよ  
 き牧者よておのれのひつと候ある。まごかの色のひつとよ  
 たら 十五 父それ候あるごとくそれハち候一。ち色ひら  
 トのうめハ命はまてん 十六 それハあつ牢ハあまらるほりれ



ひつと泣いてる。うれうをもつれきうらん。うれらもが聲と  
きうん。つひはひとりつの群ひとりつの牧者とあるべし  
ち。それを愛を。そのうれあさび命をえんごうめたいの  
ちをきうるがゆゑなり。我よりこれをうむよりのなり。ま  
れみづうううれをきうるなり。われうををきうるの権能あ  
る。まよよくあをうるのちううあり。まがちよりそれこ  
の命令をうけたり。九 さてこの言はよりてまがユダヤびと  
あうそひわうれり。十 その中あもあそこのりはひひり  
ハ鬼はつうれそらふりのあまなんぞうれは聴や。三  
ま或ひひけるハうれおにまつうれしりのくこをまあ

ハ鬼ハめしひの目をあらるこを張よくせんや。三 冬時み  
やまよめのソをひのとき。三 いまは聖殿のソロモンの廊とあ  
るまきまよ。四 ユダヤびと。うれをらまかみみてソひりるハ  
それらをのりまをうこははるや。爾もキリストならが  
あまうらよまそれらよつげよ。五 耶穌こころけるハわれあん  
ちらよつげしともなんちら信せぬ。ちの名よよりてわ  
がまこなふ事それよつてあうしるなり。六 それとあん  
ちらあんせぬ。こふなんちらよひしこくわが羊よあ  
がれをあり。七 まがひつとハわがこを聴えればうれは  
識うれわわれよあさび。八 それうきうよ永生をあまよこ



れつツつすでもあるびに亦これ証わが手よりうむふもの  
なり元。それようれら証賜たまし。それがちうハまきてのものより  
も大なり。まゝまがちうの手よりこれとらむひうるもの  
一手。それとちうとハひら一なり三。こゝよおひきユダヤびと石  
をとらむてあさうれとらんとせり三。耶穌いほせうれよこゝ  
けるハわが父よりうけそ。まきおほくの善事いひいをかんとらよ  
みせし。よそのうちつづれのものよよりそれをいし。よそ  
うとんとまらう三。ユダヤびとこゝてつひたるハ石いとて  
うとんとまらハよきわざのためよあはんとら。もい。褻瀆  
こゝれつひうらなんと人いあるよおのきを神いとかなよより

てなり三四。耶穌いほせこゝへけるハなんとらのおきてよ。それ稱い  
んぢらハ神いありとまらされし。よあうぢや三五。聖書いハやう  
らうい。神いのこゝをうけし。ものをかみといちんよ  
ハ三六。父いのきうめわつちて世よつのもせし者い。それハクみの  
子なりとつちとてなんとられとけがん。こゝれつちとい  
ふ。けんやモ。し。それわがちの事をなきはば。それと信  
むることなり。れ三六。し。これ行いば。それ証しんせ。まをまを  
のまが証しんせよ。その父いのわれよあり。我いのち。よあうこ  
と。証なんとら。まをて信いむんがうめなり三六。うれら復いとら  
んとし。うらいの耶穌いほせ。その手いをのがれてされり四一。うてま



ヨルダンのむうふあるヨハネのバプテスマをわごとせしめ  
ころはゆきてありしころよりくるは 四 おろくの人ころねい  
たりつひけるハヨハネハ休徴をあさだされどもこの人よつ  
きてヨハネのつひしころみま眞あり 三 ころはおひておろ  
くのひところしころてくれを信ぜり

第十章

ころは病者ありラザロといひてベタニアのひとなり  
ベタニアオマリアとそのあねマルタのまめる村ありニマリア  
とさたは主はにほひあがらぬを己のかみのけをもて主  
のあしぬをひしひとまて。このやめるラザロハうねが兄弟  
あり 三 このゆきはその姉妹ハ直儀のもとも主のあいまるも

のやめりといひつるりせり 四 耶穌ころねばきてころひける  
ハこの死るやまひはあは神のきしえのためあり神の子  
きてころをよくりて榮をえせしめんおめなり 五 ころ  
マルタとそのいもと及ラザロハい直儀の變まるころあ  
ののなり 六 このあは耶穌そのやめるばきてころとこ  
ろは二日といまり 七 そのおち門徒しひくるハころねらま  
ユダヤはゆくづーハころひくるハラビユダヤ人をさ  
きころも石をもてあんちばころんとせしころころ  
ゆきころあめ 九 耶穌ころけるハ一日のうちは十二時あ  
るはころばやひと一日間あるころはつまらころなり。そ



この世のひうをばみちよりなり <sup>十</sup> まさ人 <sup>も</sup> する  
あまのつまづくべし。その <sup>光</sup> そのひと <sup>は</sup> あまの <sup>あ</sup> あり  
<sup>十一</sup> 耶穌 <sup>の</sup> くつひてのち <sup>で</sup> 一 <sup>は</sup> ひける <sup>は</sup> 友 <sup>ラザロ</sup>  
いね <sup>より</sup> まれ <sup>の</sup> ば <sup>さ</sup> ま <sup>ん</sup> <sup>の</sup> め <sup>は</sup> ぬ <sup>く</sup> <sup>べし</sup> <sup>十二</sup> 門徒 <sup>い</sup> ひ  
ける <sup>は</sup> 主 <sup>よ</sup> う <sup>れ</sup> <sup>も</sup> 一 <sup>い</sup> ね <sup>し</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ば</sup> <sup>い</sup> <sup>え</sup> <sup>ん</sup> <sup>十三</sup> 耶穌 <sup>い</sup> <sup>れ</sup> <sup>の</sup>  
ま <sup>よ</sup> <sup>し</sup> <sup>を</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup> <sup>る</sup> <sup>な</sup> <sup>れ</sup> <sup>ど</sup> <sup>で</sup> <sup>し</sup> <sup>ち</sup> <sup>の</sup> <sup>寝</sup> <sup>て</sup> <sup>や</sup> <sup>め</sup> <sup>る</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>を</sup> <sup>い</sup>  
つ <sup>る</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>ま</sup> <sup>く</sup> <sup>ま</sup> <sup>十四</sup> この <sup>ゆ</sup> <sup>ゑ</sup> <sup>は</sup> 耶穌 <sup>あ</sup> <sup>き</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>よ</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup>  
よ <sup>つ</sup> <sup>げ</sup> <sup>て</sup> <sup>つ</sup> <sup>ひ</sup> <sup>け</sup> <sup>る</sup> <sup>は</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ザ</sup> <sup>ロ</sup> <sup>も</sup> <sup>死</sup> <sup>ま</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ち</sup> <sup>ら</sup> <sup>ば</sup> <sup>一</sup> <sup>を</sup> <sup>信</sup> <sup>せ</sup> <sup>し</sup>  
む <sup>る</sup> <sup>な</sup> <sup>ら</sup> <sup>ば</sup> <sup>一</sup> <sup>を</sup> <sup>喜</sup> <sup>ば</sup> <sup>れ</sup> <sup>し</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>し</sup> <sup>一</sup>  
こ <sup>よ</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>く</sup> <sup>べし</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>デ</sup> <sup>ト</sup> <sup>モ</sup> <sup>と</sup> <sup>ト</sup> <sup>マ</sup> <sup>ス</sup> <sup>あ</sup> <sup>の</sup> <sup>の</sup> <sup>門</sup> <sup>徒</sup> <sup>と</sup> <sup>ち</sup> <sup>は</sup>

つひ <sup>く</sup> <sup>る</sup> <sup>は</sup> <sup>わ</sup> <sup>ら</sup> <sup>も</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>に</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>き</sup> <sup>て</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>と</sup> <sup>と</sup> <sup>も</sup> <sup>に</sup> <sup>一</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>く</sup> <sup>一</sup>  
耶穌 <sup>つ</sup> <sup>り</sup> <sup>て</sup> <sup>ラ</sup> <sup>ザ</sup> <sup>ロ</sup> <sup>が</sup> <sup>ま</sup> <sup>で</sup> <sup>は</sup> <sup>墓</sup> <sup>に</sup> <sup>も</sup> <sup>つ</sup> <sup>ま</sup> <sup>せ</sup> <sup>て</sup> <sup>四</sup> <sup>日</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ば</sup>  
あ <sup>れ</sup> <sup>り</sup> <sup>一</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>ベ</sup> <sup>タ</sup> <sup>ニ</sup> <sup>ア</sup> <sup>も</sup> <sup>エ</sup> <sup>ル</sup> <sup>サ</sup> <sup>レ</sup> <sup>ム</sup> <sup>に</sup> <sup>ち</sup> <sup>ら</sup> <sup>し</sup> <sup>一</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>その</sup> <sup>處</sup> <sup>に</sup> <sup>一</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>お</sup>  
よ <sup>そ</sup> <sup>バ</sup> <sup>セ</sup> <sup>丁</sup> <sup>な</sup> <sup>り</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>お</sup> <sup>な</sup> <sup>く</sup> <sup>の</sup> <sup>ユ</sup> <sup>ダ</sup> <sup>ヤ</sup> <sup>び</sup> <sup>と</sup> <sup>マル</sup> <sup>タ</sup> <sup>と</sup> <sup>マリ</sup> <sup>ア</sup> <sup>は</sup> <sup>その</sup> <sup>兄</sup>  
弟 <sup>の</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>よ</sup> <sup>り</sup> <sup>て</sup> <sup>あ</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>り</sup> <sup>ん</sup> <sup>と</sup> <sup>て</sup> <sup>ま</sup> <sup>で</sup> <sup>よ</sup> <sup>う</sup> <sup>れ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>も</sup> <sup>と</sup> <sup>は</sup>  
き <sup>こ</sup> <sup>り</sup> <sup>な</sup> <sup>れ</sup> <sup>を</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>マル</sup> <sup>タ</sup> <sup>も</sup> <sup>耶穌</sup> <sup>き</sup> <sup>こ</sup> <sup>り</sup> <sup>と</sup> <sup>き</sup> <sup>て</sup> <sup>こ</sup> <sup>れ</sup> <sup>は</sup> <sup>い</sup> <sup>で</sup>  
む <sup>う</sup> <sup>く</sup> <sup>マリ</sup> <sup>ア</sup> <sup>も</sup> <sup>か</sup> <sup>ら</sup> <sup>室</sup> <sup>に</sup> <sup>ま</sup> <sup>さ</sup> <sup>せ</sup> <sup>り</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>マル</sup> <sup>タ</sup> <sup>い</sup> <sup>は</sup> <sup>い</sup> <sup>ひ</sup> <sup>く</sup> <sup>る</sup>  
ハ <sup>主</sup> <sup>よ</sup> <sup>こ</sup> <sup>し</sup> <sup>は</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>せ</sup> <sup>し</sup> <sup>な</sup> <sup>ら</sup> <sup>ば</sup> <sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>  
し <sup>の</sup> <sup>後</sup> <sup>ニ</sup> <sup>然</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>く</sup> <sup>い</sup> <sup>ま</sup> <sup>す</sup> <sup>な</sup> <sup>ん</sup> <sup>ち</sup> <sup>が</sup> <sup>神</sup> <sup>と</sup> <sup>も</sup> <sup>と</sup>  
む <sup>る</sup> <sup>こ</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>れ</sup> <sup>し</sup> <sup>の</sup> <sup>ハ</sup> <sup>神</sup> <sup>あ</sup> <sup>ん</sup> <sup>ち</sup> <sup>は</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>ま</sup> <sup>と</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>ニ</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>  
耶穌 <sup>つ</sup> <sup>ひ</sup>







くさる視よいらむをうりうれは愛まらるものを 三 そのうちな  
る人 四 のひくさるいめしひの目とひらきするこの人 五 してか  
れを死 六 ざらしむることあはきり 七 や 八 耶穌 九 するところ  
を 一〇 してま 一一 けて墓 一二 につくる。はか 一三 を洞 一四 みてその口 一五 のところ  
は石 一六 をおけ 一七 三 耶穌 一八 のひくさるい 一九 してのけ 二〇 死 二一 するもの  
きやう 二二 ざい 二三 マルタ 二四 のひくさるい 二五 主 二六 ようれ 二七 のち 二八 臭 二九 するよ  
う 三〇 するよ 三一 四 三二 日 三三 越 三四 して 三五 耶穌 三六 するよ 三七 のひ 三八 ける 三九 は 四〇 なん 四一 ち 四二 も  
し 四三 せん 四四 ぜ 四五 ば 四六 神 四七 の 四八 さ 四九 り 五〇 え 五一 を 五二 も 五三 べ 五四 し 五五 と 五六 それ 五七 なん 五八 ち 五九 よ 六〇 の 六一 ひ  
は 六二 あ 六三 り 六四 ば 六五 や 六六 四 六七 の 六八 ひ 六九 よ 七〇 その 七一 石 七二 越 七三 する 七四 も 七五 の 七六 を 七七 お 七八 き 七九 たる 八〇 と 八一 こ  
ろ 八二 よ 八三 する 八四 も 八五 の 八六 け 八七 する 八八 い 八九 ち 九〇 天 九一 を 九二 あ 九三 ら 九四 ぎ 九五 して 九六 の 九七 ひ 九八 ける 九九 は 一〇〇 父 一〇一 よ

き 一〇二 ぞ 一〇三 よ 一〇四 わ 一〇五 れ 一〇六 よ 一〇七 き 一〇八 け 一〇九 する 一一〇 わ 一一一 れ 一一二 こ 一一三 も 一一四 を 一一五 あ 一一六 ん 一一七 ち 一一八 よ 一一九 謝 一二〇 する 一二一 一二二 それ 一二三 ん  
ち 一二四 が 一二五 つ 一二六 ぬ 一二七 よ 一二八 それ 一二九 を 一三〇 聽 一三一 こ 一三二 ころ 一三三 を 一三四 する 一三五 あ 一三六 り 一三七 する 一三八 に 一三九 わ 一四〇 づ 一四一 か 一四二 ぐ 一四三 り 一四四 あ 一四五 は  
か 一四六 ざ 一四七 り 一四八 よ 一四九 た 一五〇 てる 一五一 人 一五二 を 一五三 して 一五四 なん 一五五 ち 一五六 の 一五七 ま 一五八 れ 一五九 を 一六〇 つ 一六一 の 一六二 ま 一六三 せ 一六四 し 一六五 こ  
と 一六六 を 一六七 信 一六八 ぜ 一六九 し 一七〇 め 一七一 ん 一七二 と 一七三 して 一七四 な 一七五 り 一七六 一七七 如 一七八 此 一七九 の 一八〇 ひ 一八一 いて 一八二 あ 一八三 ら 一八四 ぐ 一八五 急 一八六 よ 一八七 よ 一八八 び 一八九 い  
ひ 一九〇 ける 一九一 は 一九二 ラ 一九三 ザ 一九四 ロ 一九五 よ 一九六 い 一九七 せ 一九八 よ 一九九 二〇〇 死 二〇一 者 二〇二 ぬ 二〇三 の 二〇四 ま 二〇五 け 二〇六 て 二〇七 手 二〇八 足 二〇九 を 二一〇 ま 二一一 ぐ 二一二 り 二一三 れ 二一四 ま 二一五 ぐ  
面 二一六 いて 二一七 ぬ 二一八 ぐ 二一九 ひ 二二〇 ま 二二一 して 二二二 つ 二二三 ち 二二四 ぎ 二二五 して 二二六 出 二二七 い 二二八 ち 二二九 へ 二三〇 う 二三一 れ 二三二 ぐ 二三三 よ 二三四 の 二三五 ひ 二三六 ける  
い 二三七 う 二三八 れ 二三九 ば 二四〇 ち 二四一 き 二四二 ぐ 二四三 ち 二四四 あり 二四五 ぐ 二四六 ち 二四七 り 二四八 め 二四九 よ 二五〇 二五一 マ 二五二 リ 二五三 ア 二五四 と 二五五 ち 二五六 も 二五七 よ 二五八 き 二五九 ぐ 二六〇 ち 二六一 り  
ユ 二六二 ダ 二六三 ヤ 二六四 ビ 二六五 と 二六六 耶 二六七 穌 二六八 の 二六九 せ 二七〇 し 二七一 こ 二七二 ころ 二七三 ば 二七四 み 二七五 て 二七六 お 二七七 ら 二七八 ぐ 二七九 う 二八〇 れ 二八一 ば 二八二 信 二八三 ぜ 二八四 り 二八五 二八六  
され 二八七 とも 二八八 その 二八九 う 二九〇 ち 二九一 よ 二九二 パ 二九三 リ 二九四 サ 二九五 イ 二九六 の 二九七 入 二九八 り 二九九 よ 三〇〇 め 三〇一 きて 三〇二 耶 三〇三 穌 三〇四 の 三〇五 せ 三〇六 し 三〇七 こ 三〇八 ころ  
な 三〇九 つ 三一〇 げ 三一〇 ち 三一〇 の 三一〇 あり 三一〇 三一〇 ち 三一〇 ち 三一〇 よ 三一〇 お 三一〇 い 三一〇 ち 三一〇 祭 三一〇 司 三一〇 の 三一〇 長 三一〇 ち 三一〇 ち 三一〇 と 三一〇 パ 三一〇 リ 三一〇 サ 三一〇 イ



のひとと議官あかしやうをよびあつめてつひけるいわれらいうよま  
べきやこの人ひとおろくのあつてはあはなり四六うればこ  
のまよふまをておつて人ひとまふれを信ぜんさらば羅馬の人  
まよつてそれらの地とちをも民たみをもうをまて四九そのうち  
ひくりまてこの歳のさいの長ながなるカヤバとつづるもの  
うれまよひひくる人ひとあまもよまに五〇ままた  
みのためよ一人ひとりあつて舉國こくあろびざるはそれらの益えきとする  
ことともおももざるあり五一この言ことばのおのれよりつて  
あつてこのとりの祭司かひのまよあるまより耶穌いすれのこは民たみの  
まよよめざることば預言よげんせるなり五二たゞよこのまよのた

めのみあつて散ちりする神かみのことどもらまひつるあつめん  
がまあり五三さてこの日ひよりうれは耶穌いすれところあさん  
ことまにまかる五四このゆゑよ耶穌いすれうれよりあつてはユダヤ  
びとの中なかとあつてうべをまよて野のまちりまよとつるあつ  
エフライムエフライムとりまよまよゆきて門徒かどともまよまよれ五五  
ユダヤびとの逾越あしなのいまひちのづきまればひとぐかのま  
は潔きよんがまよまよまよのいまひのまよは郷間きやうかんよりエルサレム  
まのまよ五六耶穌いすれとつね聖殿みやまよてあひまよひまよひ  
けるまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ五七  
の長ながまよまよパリサイの人ひとまよまよまよまよまよ耶穌いすれの



ありかどあるひとあはるが告べーとりよ。らはうれととらく  
んとあるかり

第十三章 逾越のいさひの六日まへ 耶穌ベタニヤよりつくる。まへ

ハ即ちあはるてすみぎくそーラザロのさるさるころなり。こ  
よおいきあはるひちぐこのとらあまて 耶穌よふるまひとま  
うくマルタ 給仕とあせり。ラザロもいさへともよ坐せしもの  
うちの一入あり。三 マリアも真正のナルダあはるあはるひとらまに  
ほひあはる一斤とちきくりて 耶穌のあはるぬも。まへお  
の頭髪してそのあはるぬもつり。あはるのほひあはる  
く室中よみたり。そのでーの一人あはるイスカリヲテのユダ

あるハち 耶穌をわとさんとけるものつひけるハ。この香  
膏となあぞ 銀三百ようまてまぐきものようあはるさる  
や。うれぐらうくつくる貧者をおもよあはるぬひび  
よてうら 金囊もちそのうちうらまたるものさうなふも  
のあれはかり。七 耶穌よひたるハうれはかしたるありまわ  
が葬の日はとらよこれとさくさくころ。ハまぐきものハ  
つねよあんぢらとともにあれどそれハ常よなんぢらとと  
もにあらは。九 おろくのユダヤびと 耶穌がこころをばあり  
てきく。たゞ一 耶穌のこめのみよあはるまそのよみふ  
つらせしころのラザロともみんとおもくるあり。祭司



のどきうらラザロをこころさんとちりる 七 そハラザロは  
こころうまでおふくのユダヤびとゆきて耶穌をいんむる  
がゆゑあり ○ 八 あらる日おふくのひとく節よきうり 耶  
蘇のエルサレムよきうらんときまを 九 捜葉ととり。あきそくれ  
ら城むうくホザナよ主の名よよまできこるイスラエルの王いさ  
いまひかりと 十 ようくむりいん驢馬の子とえてこれま  
の 十一 ちるしてシオンの女よあそるをたつれ視よあんぢの  
王ハろむの子よふまできこるやあるがごとく 十二 門徒うち  
ちドめをうねこころ城さうらぎまうが耶穌さかえをうけ  
れちようれら此事れくれよつゝいさされまこそれこころを

ひくぐ彼よおこあひとまをとおもひつごせ 十三 耶穌の  
ラザロ城墓よりよびりてよみづくらせるときうれと  
どもにちりものども 十四 證城なせ 十五 この休徴をなせ  
と城きうふよりきひとくかきを迎ふるなり 十六 こころよお  
いてパリサイの人たぐひよひひたるいあんぢらうはつると  
ころの益なきをあらばやみよ世ハこころれよあそづく  
○ 十七 禮拜のためいまひよほれるものはうちよキリヤの  
人あり 十八 うれらガリラヤのベツサイダのひとあるピリポよき  
たり求ていひけるを君よわれら耶穌よまみえんこころをね  
がふ 十九 ピリポきうりてアンデレーよつぐアンデレーまこピリポと



ともに耶穌は法を三 い返しうねらよこゝしてつひけるを  
人の子きてつえをうくべきときつてわれを<sup>二</sup>まことよくあん  
ぢらよづげん一粒は麥を<sup>一</sup>地よあちて一なるまがてひと  
つまでららん。も<sup>一</sup>死におほくの實をむまがべ<sup>二</sup>そのい  
のち法を<sup>一</sup>むそののこれせう<sup>一</sup>ひその生命とせ<sup>一</sup>まさ  
るものもあれと存てうぎりあきいのちよいつるべ<sup>一</sup>人<sup>二</sup>  
も<sup>一</sup>それよつてつんとせむ<sup>一</sup>わきよ<sup>一</sup>從<sup>一</sup>願<sup>一</sup>されよつてある  
ものハ我とるとらよ<sup>一</sup>ぢらん人<sup>一</sup>も<sup>一</sup>それよ法をうねば<sup>二</sup>  
が父ハこれと貴べ<sup>一</sup>も<sup>一</sup>つまもつて<sup>一</sup>ろ<sup>一</sup>うねく<sup>一</sup>つてりもな  
まぬいもんや父よこのときよりそれとほまひをまくとい

もん<sup>一</sup>否<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>き<sup>一</sup>が<sup>一</sup>ぢ<sup>一</sup>め<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>われ<sup>一</sup>此時<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>あり<sup>一</sup>六  
くの父よなんぢの名のきつえをあらもせ。このとき天より  
こゑありてつよ。それその榮をまを<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>き<sup>一</sup>再<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>む<sup>一</sup>を<sup>一</sup>あ  
ら<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>べ<sup>一</sup>一<sup>二</sup>旁<sup>一</sup>邊<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>て<sup>一</sup>る<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ぐ<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>を<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>く<sup>一</sup>て<sup>一</sup>雷<sup>一</sup>を<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>り  
とつよ。あるひと天のつてひうねよう<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>ありとつ  
て<sup>一</sup>耶穌<sup>一</sup>こ<sup>一</sup>て<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>け<sup>一</sup>る<sup>一</sup>この聲ハ<sup>一</sup>わ<sup>一</sup>が<sup>一</sup>た<sup>一</sup>め<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>び  
なんぢらのごめあり<sup>三</sup>この世ハ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>罪<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>づ<sup>一</sup>め<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>る<sup>一</sup>この  
よの主ハ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>ま<sup>一</sup>べ<sup>一</sup>一<sup>二</sup>三<sup>一</sup>それ<sup>一</sup>も<sup>一</sup>地<sup>一</sup>より<sup>一</sup>あげら  
れるを<sup>一</sup>萬<sup>一</sup>民<sup>一</sup>族<sup>一</sup>ひ<sup>一</sup>き<sup>一</sup>を<sup>一</sup>つ<sup>一</sup>れ<sup>一</sup>よ<sup>一</sup>ぢ<sup>一</sup>て<sup>一</sup>せん<sup>三</sup>如此<sup>一</sup>の<sup>一</sup>法<sup>一</sup>を<sup>一</sup>の<sup>一</sup>  
つちもそのつちたするきぬよて死んとほる<sup>一</sup>法<sup>一</sup>を<sup>一</sup>せ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>あり



言人々われよりしてのひけるはわれら律法にてキリスト  
いふなりおき存のありときよ一はなんぢ人の子このあ  
はあがられんとつよいなんぢや此ひと世ことい誰ある  
三 耶穌 うれらよのひけるはなんぢをばぶるくのあひど 光あ  
ぢらとともたありひうそあるうちよあるきて 暗はあひつ  
うれざるやうせよ。くらきよあるくものいそのゆゑさきこ  
ははあはは 三 なんぢらひうりの子とあるべきさめよ 光の  
あはらちよひうそをせんせよ 耶穌 これはのひをばまうれ  
らはさけて 隠るり 〇 三 といはれはうれのまへよこのくおわく  
の休徴はなうれどもなやうれをせんせざりき 三 とい  
預

言者イザヤふつひ一ころよ。それらのつげ一ころは信せ  
ぬのいそれぞや主の手はたれよあらはれ一やとあるふか  
あくり 一 イザヤまさりか。うれ目みて見らるあせさ  
りあらうめていやさる。ころは得きらんひさめようれを  
のりは撃一そのころるは頑梗せりと。このゆゑはうれら信  
ぢらることあははは 二 イザヤをうれは榮はみ一よりうれ  
よついでころいかされるなり 三 うれと有司さちのうちよ  
あほくうれはせんぜ一ものあま一がパリサイの人はあそ  
れであらつよ信はるといをざりき。その會堂よりあをけ  
らるんころをあをれさるよよる 四 うれころるの神のほま



れより人のあまれをこの世にたたり○<sup>四</sup> 耶穌よをうそつひ  
けるんそれ信はるものいそれをしんせらるあはれ我を  
はくろせーもの彼をんせらるあり<sup>五</sup> まるわれを見ものわ  
れ彼はくろせーもの彼みるあり<sup>六</sup> われん光よーて世よき  
それまきべてそれ彼しんせらるもの彼て暗よちら  
めんくめたり<sup>七</sup> 罪人もーわくくを彼きくてまめらる  
もその罪をささめば。そゞきくりーん世のつみをささめん  
くめよあくは世をまきはんくめたり<sup>八</sup> それ彼棄そゞくと  
をそのれざるものれつみを定るものあり。まらはちわがい  
ひー言はるその日られが。つみをささむべー<sup>九</sup> それお

のれよりつあよあくはそれ彼つをせー父わくつあべき  
らと我くさるべきくを命トくめらるなり<sup>一</sup> そのめいト  
くめらるらるいまおつち永生なるをわきある。このゆゑよ  
まがりよとるら父のつげくめらるよつらるなり

第十三章

まきこーのいまひのまへよ耶穌この世をさうて父

ようくさるべきときつらるる彼を世よあまーかのれぬ民  
彼をよあいーをたりよつらるまをこれ彼愛せり<sup>二</sup> とき  
よのれく晩飯のせきよつら。あくまハこうねて耶穌わささ  
んとけるこく彼シモンの子イスカリヲテのユダとつあものれ  
心よあこさーめく<sup>三</sup> 耶穌かのれの手よちくのまての







らもさうしたつひは足であらうとて——<sup>五</sup>これなんぢらに例を  
志免せり。らんわくのちせ——ごときなんぢらも行——めんが  
た免ある。夫それさうとみくあんぢらまつげん志免とてその主  
よりおほいあはれにまさ使<sup>つひ</sup>者もこのちせをつつちけよものより大<sup>大</sup>  
なうに<sup>七</sup>あんぢらも——これをありてこのごときなるうに  
福なり<sup>六</sup>そのつひ——とらるのあんぢらをかきとて指<sup>指</sup>るよあ  
らん。われもその選<sup>選</sup>——ものをある。あつれども聖書よこれを  
ごまに食<sup>食</sup>はるものちせよそむきて踵<sup>踵</sup>とあげ——とらるうに  
——ようあはせんごめなり<sup>九</sup>その事のつらんときたなんぢ  
らわれ信<sup>信</sup>トてキリストとせんごめよそのこころおつてさ

る今<sup>今</sup>よりこれをなんぢらよ告<sup>告</sup>——まこととみくなんぢらよつ  
けんそのつはりのちせとらるま我<sup>我</sup>とらるありわれは  
接<sup>接</sup>きそれとつのもせ——ものをはうらるなり<sup>三</sup>耶穌このこと  
はつひて心<sup>心</sup>はうれくあつ——ていひけるも誠<sup>誠</sup>よまこととに  
なんぢらよつげん<sup>一</sup>一人なんぢらのうちよそれとわさけも  
のあり<sup>三</sup>門徒<sup>門徒</sup>ごちたごひよのちけみあをせ誰<sup>誰</sup>をさ——てい  
つるあまのとうごうよ<sup>三</sup>耶穌のあをさるひくりのぞり耶穌<sup>耶穌</sup>  
のむねよよらるあま——が<sup>三</sup>シモンペテロごちたをさ——  
てつるあまのちせとを——めんと首<sup>首</sup>はもて志免せり<sup>三</sup>い  
はの懐<sup>懐</sup>よよらるをさ——の耶穌よつひけるも主<sup>主</sup>よたれあ



その 二六 耶穌 いせい こゝろけるいわれひとつまみの食物 しよく にものを  
濡 ぬ てあさる人 ひと もそれなまをそてつひは一撮 ひとつぽ のとひもの  
ものをつけてシモンの子 こ イスカリヲテユダはあつふ モ 彼 かれ が  
ひとつまみはものをとけーそのときサタナ サタナ うれようれを  
こしておいて耶穌 いせい うきよひけるもなんぢがまさんとほ  
るころの速 すみ くなせ 元 うれよなふゆえよくつひーをど  
もに席 せき にとるものごもの中 ち たるものあくざりき 元 あらひ  
とユダの金囊 かね をあらうれるゆえ耶穌 いせい うれはーをいぢひよ  
ついで用 もち べきものをかそーむるならん 亦 ハマラーきも  
のにかとこさーむるならん 亦 ともく 三 さて彼 かれ のひとは

まみのとひものをとけてたゞちよつでさうり時 とき もあつては夜  
ありた 三 かれの以 も ーはち耶穌 いせい つひけるるつま か 人 ひと の子 こ さ  
かえをうく神 かみ もさかれよよりて榮 えい げうらるる 三 神 かみ ー  
うれよよをてさつえをうらるるは神 かみ もささみあう 三 け  
さつえのうちよ 三 色 いろ をさつえーむ直 ただ ー 三 色 いろ げさうえーの  
ん 三 小 こ 子 こ よ 三 うれあ 三 不 ふ 志 し ば 三 うれあ 三 ん 三 ぢ ぢ ら 三 や 三 とも 三 は 三 あ 三 り 三 な 三 ん  
ぢ ぢ ら 三 ら 三 ぬ 三 ば 三 尋 たづ ね 三 ん 三 わ 三 が 三 ゆ 三 く 三 と 三 ころ 三 は 三 な 三 ん 三 ぢ ぢ ら 三 ら 三 る 三 の 三 こと  
あ 三 へ 三 は 三 前 まへ 三 よ 三 うれ 三 と 三 エ エ タ 三 ヤ 三 ひ 三 と 三 よ 三 の 三 今 いま 三 ち 三 うれ 三 と 三 な 三 ん  
ぢ ぢ ら 三 は 三 法 は 々 三 三 うれ 三 新 あらた 誠 まこと 三 ば 三 あ 三 ん 三 ぢ ぢ ら 三 は 三 あ 三 へ 三 ち 三 ら 三 ら 三 る 三 も 三 ち 三 あ 三 ん  
ぢ ぢ ら 三 相 あひ 愛 あい 三 ま 三 べ 三 ー 三 と 三 ぬ 三 こ 三 れ 三 な 三 ら 三 ぬ 三 べ 三 ー 三 ち 三 ら 三 ら 三 ぬ 三 あ 三 い 三 け 三 る 三 こと



とくなんぢもあひ愛まべ—<sup>三五</sup> あんぢも— 棟あひ世  
バあれよとて人々あんぢらのわがで—あることばあふ  
ペ—シモンペテロかれよひひたるも主の御こゝゆきたまふ  
や耶穌<sup>いすい</sup>うれよあふけるわが往<sup>ゆ</sup>とるへをならんらうい  
まあさうよことけりん後<sup>あと</sup>わをよあふらん <sup>三三</sup> ペテロうれ  
よひひたるも主よなまゆゑよゆなんぢよ從<sup>ま</sup>ことあふ  
さるもそれいあんぢのよめよわが命<sup>いのち</sup>あまらん <sup>三六</sup> 耶穌<sup>いすい</sup>うれ  
よとくけるいなんぢいのちをわがため捐<sup>たま</sup>るやまこと  
ふまことよあんぢよつげん<sup>つげん</sup> 鶏<sup>けい</sup>あふさるまよなんぢ三<sup>みつ</sup>次<sup>じ</sup>  
それとあふいとらん

第十四章

あんぢら心ようれあることなうれ神を—んとまこ  
それ信<sup>しん</sup>べ— = わが父<sup>ちち</sup>のつ—よを第宅<sup>たいてい</sup>おほし。あうら  
べわれかぬやなんぢらよこををつぎ履<sup>はき</sup>きなり我<sup>われ</sup>あんぢら  
のよめよとるば備<sup>そな</sup>よゆき <sup>三</sup> 一 ゆきてわれあんぢらの  
よめよ所<sup>ところ</sup>をそあふをまこたててあんぢらとわれよ納<sup>たく</sup>べ  
し。まがさるやとるよなんぢら<sup>二</sup> 彼<sup>かれ</sup>も居<sup>ゐ</sup>—らんとなり <sup>四</sup> 一  
んぢらまがゆきところをまをまこその途<sup>みち</sup>あふ <sup>五</sup> トマス  
いひたるい主よわれらなんぢのゆきところを—らん何<sup>なに</sup>よ  
—そそれみちを—らんや <sup>六</sup> 耶穌<sup>いすい</sup>うれよひひたるいそれ  
途<sup>みち</sup>あり眞<sup>まこと</sup>あり生命<sup>いのち</sup>なまらん—われよとるがまが父<sup>ちち</sup>のよ—



よゆくとあさりバセ  
も識べー。のまよをあんぢううね返あるなり  
らかれ返みさうり ハピリボうねさうひけるい主よわれうよ  
ちとあうさうーさまへさううバ足さうい返まうねさうひけ  
るハピリボわれ如此ひさうあんぢうとさまよをさうー小  
いまさうねと識さうさうわれを見さうのま父をさうーなり。な  
んぞさうをわれさうあうさうせとりみや+それ父よをりち  
のわさうさうさうさう信ぜさうさう。わさあんぢうさうさうさうー  
さうさうみさうさう語さうあうはわさうさうさう父そのわさ返か  
せるなりさうーそれさうさう居ちさうねさうさうさうわさうはげー

さうさう信ぜさうさうーあんぢうバさうさう事さうよりてくれと信ぜ  
べー<sup>十二</sup> まことにくなんぢらさうつげん。それ返あんぢうさうもの  
へわさう返さうさうの事さうなさん。さうこれより大さうさうさう  
返なう返べー。それわれさうさう父へゆけをなり<sup>十三</sup> あんぢらさうべ  
てさうさう名さうよさうてねさうさうさうこれさうさう我さうさうてあれと  
なさん父のさうさうえの子さうよさうさうあらをねんさうさうあり<sup>十四</sup>  
さうーなんぢらあさうさうさうてもさうさう名さうよよりてねさうさうり。我  
さうねとあさん<sup>十五</sup> さうーなんぢらわれ返愛返さうさうバさうさう識  
返まわれ<sup>十六</sup> それちさうさうとあん父かさうに別さうなさうさうさ  
るさうの返なんぢらさうさうさうひてかぎりさうさうあんぢらとさうさ







なりち聖靈をまぐてのこらばなんぢらよをへ亦わがま  
べてなんぢらよのこをなんぢらよにおもひいざき  
むべーモそれ平安ななんぢらよにたはわがやまきばなん  
ぢらよ予があつるところの世のあつるところの  
ときよあつばなんぢらよの憂なうれまの懼なわれ  
われゆきてまごあんぢらよまきらんとなつて  
なんぢらよきけそ。わがわのせは父はゆくとなつて  
るこらばなんぢらよのなまきなり。そなわがちハそれ  
より大なるなり。元あとつまご成ばそれまづなんぢらよ  
つご事あらんときよなんぢらよを信むまきとあり

このみちをまおほくの言をゆてあんぢらよのこらば。そそ  
あゆねまきするゆ急なま彼それよか。まことなり  
されどまきこれとあまのわきは父とあつてまごその命ぜ  
るこらばまきとあつておこあまのこらば世はまごらんた  
めあり起よそれらこらばまきとあり

第十五章

われはまごの葡萄樹まづちの農夫なり

よあまをまきて實はむきをまきとあつてこれとありと  
まきとみはむは枝のこればかまごのこらばまきとあつて  
くみは結あめんまかまき。いまなんぢらわがのこらば  
はふよまて潔なるなり。あんぢらよそれよ居まらばそれまご



あんぢらよとらん枝えだ——ぶさうのきよつらあうざればみ  
づうう實み試しむはぶことあうらば。なんぢらもそれよつらな  
らざれをまこかゝのうとくならん 五 それハぶさうの樹きを  
んぢらハそれえさなま入いりやまよをまわれまこうれよ  
きうバおろくの實みとむはぶ。そのも——なんぢら我われをま  
なすしとまはなふごとくもなす——あうらざれをまを 六 人も  
——われよとらざればまなれとら枝えだのごとくそとんまてら  
れて枯かるなり。ひとそれをあうた火ひよなげりきてやくべ—  
七 なんぢらも——われよをままこわがりひ——と爾なんぢら儕らよと  
らばまべてねがふととら求もとよ考かとびひてあうらうらうべ—

ハあんぢらおほくの實みとむはむ。わがちうこれよよりて  
榮さかとらう。それがなんぢらわが門徒でなま九くちそれわれと愛あい  
——とあふととわまなんぢらとあいは。なんぢらわが愛あいよ  
それ——あんぢらわがいのま——めとまゆらうわが愛あいよと  
らん。それわがちうは誠まことなまよりてそのあひよとらう。こ  
ト——これこのうらばあんぢらよかうらハわが喜よろこあんぢら  
にあまそあんぢらうのよろうびとみと考からんがうらあり 十二  
こそがあんぢらうは愛あいはるごとくあんぢらもまこたうびよあ  
わひぐ。これこそが誠まことあり 十三 ひとそれ友とものうらよおの建たの  
命いのちとまうらう。これよりあひあるあひハなり 十四 みるてそ



がなんぢうまゆいばるところのこゝろはこゝろにあらざるまゝの  
ちわが友あり 主のまゝのちわれなんぢうと僕といふを  
そのまゝもべもその主のまゝのこゝろをあらざるが有りやま  
まゝなんぢうと友とよふを。ちわがなんぢうとわが父よりき  
まゝとてこのこゝろのこゝろはあらざるつげはまゝのこゝろ  
れと選りてまゝなんぢうとえらぶ。うらなんぢうとてゆ  
まゝに實はむねをせそはみはまゝのまゝのこゝろを。まゝの  
ぢうのまゝとてまゝの名はまゝをてちうまゝのこゝろのまゝの  
彼をてなんぢうまたまゝのせんまゝのちわれなんぢ  
らとたてしうりまゝなんぢうたてむまゝの愛せんまゝのちわれこれ

と命に大世のなんぢうとにまゝのまゝのなんぢうよりまゝ  
まゝのちをて悪とまゝのなんぢうの世のものなまゝのまゝの  
あの世の屬はありまゝ。されどなんぢうへまゝのまゝの  
は。されどなんぢうと世のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
ちうはまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
なんぢうまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
めばなんぢうまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
らの言まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
一のちまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの  
とちなんぢうまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

新約全書 約翰傳第十五章 自一至七節 六十一



なすべしとわれしつみなすらん。されどいぬきその罪いひゆる  
くべきやうなり。三 それ故にむすのたまふにわがちととも  
よとむなり。四 これも他の人のせざるにわが故にわれらの  
うちよおこさるるにあらばわれら罪あるらん。されどそ  
れともが父と証しをば見しうたわれをふくめし。五 このこ  
とをいふわれらのおきては故なくしてわれをよくめしと録  
せしことにかみせん。六 それなるにむすもの孩  
父よりおらんまをちちよりいづる真理のみとむな  
し。そのきこむときわがちめは證となすべし。七 むんぢらも  
まことわれと偕よとめしよりとむしはよりてあつしとある

第十六章

わがちわれらのあやとあんならば語らばなんぢらに  
ほまづつきしんうめなき。八 ひとりあんならば會堂より去  
りてく。九 まさまてあんならば証する者みづしう神は  
つうめるとおもふときいふらん。三 それらのうち証する  
はなは父とそれとあはざるがゆゑあり。四 われら証を  
あんならばかきしるは時いふにわが証をいひしこと  
をなんぢらにおもひいせんためあり。前にあれをあんなら  
ばうらむるに我なんぢらとともになすべしとあり。五  
われ今われとつうはせしものゆゑんとす。されどなんぢ



らばうちわれよりらく往とたがぬるものあり六 うつ  
て我こそはこそ返りひよりよりて憂なんぢのころあよみ  
たり七 それ眞とあんぢはははげんわがゆきハなんぢの  
益あり。ゆいゆいハあきさむるものなんぢははたか  
ゆい往バうれ我あんぢはははらんハうれきとらんとき  
罪ははき義はつきさむきはつき世をしてはみありとこと  
らあめん九 つみははいてといつるもそれを信ぜざるよ  
うなり十 たはしきはついでといつるもそれを父へ申  
さよよとてなんぢらまさそれを見ざればなり十一 審判はつ  
いてといつるもこれよのぬしさをきとられもなり十二

れなほあんぢははははかするべきとあれども今あん  
ぢらさとするころ返えは十一 されと彼まはちまうとの靈の  
きとらんといはんぢら返みちび記てまての眞理をあら  
しむべし。そはうれ巴はよよとてうらよあはばそのきと  
とらるのころをなんぢらよひ亦きとらんといはるころ返  
なんぢらよ志免に盡ければあり 十二 かれわが榮を知らえさ  
ん。そそわらもの返うけてあんぢははははせをあり 十三 返  
てちのもちたまふものわがものなり。まは故はうれわ  
らものをうけてあんぢははは示といつるも 十四 返はら  
んぢらそれを見し。まは返はらとてわれをみる返し。これ



それを父へゆくなり。さてうらまわりの門徒のうちよめてあるも  
れたがひよひけるの暫せをあんぢらわきをみどまう。志  
はうそしてわれをみるべし。とひ且られわれのちよくゆ  
くなりともれらよひしんをふのうとぞや。うれうまう  
ひひけるの志はうそとひしんの何のあとぞや。そのい  
つるところは越されし。らに。耶穌。うれうがごらんとまう  
越をきてひひけるの志はうそ。我をみとまう。志はうそ  
してわれをみるべし。と言。このうらまよりてあんぢらた  
うひよらねあわつ。誠。まううらまにされあんぢらよつげ  
んなんぢらのあげきうあし。世をうらうらうら。なんぢら

うれうあさん。されどその憂をかはらしてうらうらとある  
べし。どんふ子とらまんとほるときはうらま。その期い  
るよよりてなり。されどまをうらまをゆるは苦をわける世  
よひとせうまれうらうら。よよりてなり。かぎのこと  
くなんぢらもつま憂されどそれまう。なんぢら見ん。その  
ときあんぢらのうらま。その喜樂をうらま。も  
のあら。その日あんぢらそれよ。まう。うらま。うらま。  
まう。うらま。なんぢらよつげん。お。うらま。うらま。うらま。  
よ。うらま。うらま。の。父。あ。を。なんぢらよ。うらま。うらま。  
うらま。なんぢら。いま。うらま。うらま。うらま。うらま。うらま。



とあり求もとまらばうけんあつてあんぢうのよあうび満み  
べー五とくく返もてあはこととあんぢうよかくりーが譬たと  
喩たととちあはしてあんぢうようくり父ちちよはつてあきうら  
よあめはときりらん六それ日ひあんぢうわが名なよよりて  
もとめん。それあんぢうのくめ父ちちよわがりんとおもは七  
そをちみづううあんぢうとあひはまふなり。これなんぢ  
らそれと愛あしまさちよまわがきりーくを信しんじること  
よ八それちよりつて世よよたれま。まよ返はあれ  
て父ちちよゆらん九でーうれよひけるんなんぢいまあき  
うよひて譬喩たと返もは十われらつぬなんぢのあうさう

とくろなくまさん十一のなんぢようの彫うるきらくとあう。こ  
れよまてまきく神かみよをあんぢのつてきりーくをいん  
信しん 耶穌いすうれらよくくけるん十二まあんぢう信しんじること  
ときまさまいりらん十三今いまつてまぬ。なんぢう散ちておのくその  
屬まもろとくろよゆきとやれと一人ひとりおこさん。されとそれ  
ひとまをふあらは父ちちよれとまもにまらあり十四それこの  
くはなんぢらよくりーのなんぢら返してそれよあり  
て平安やすをえせーめん十五あうめあり。なんぢう世よよありてハ患あや  
難むとけん。されとおまらなうれそれまよふ勝かり  
第十七章 耶穌いすこのくは返してくりて天てんとあまきひけ



るハ父よさき、いつりぬ。あんちね子、なんちのさうえとあ  
ちさん、さうめよ、なんちの子のさうえとあ、ちうま、二  
これ、なんち、ねよ、まひ、と、このもの、よ、われ、永生<sup>まひんせい</sup>とあ  
さ、ん、さ、う、め、ま、ぐ、て、れ、の、誠<sup>まこと</sup>を、さ、む、る、權<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>と、ま、ね、ま、う、ま  
い、さ、ね、バ、あ、り、三、う、き、り、ま、き、い、の、ち、と、ハ、唯<sup>ただ</sup>ひ、り、は、眞<sup>まこと</sup>神<sup>かみ</sup>を  
る、なんち、と、その、つ、つ、り、せ、い、は、キ、リ、ス、ト、誠<sup>まこと</sup>と、是<sup>こゝろ</sup>、な、り、四  
われ、なんちの、榮<sup>いばら</sup>、誠<sup>まこと</sup>よ、あ、ら、り、。、なんちの、ま、ね、よ、託<sup>たく</sup>、と、こ  
ろの、ま、さ、い、ま、れ、う、き、と、成<sup>な</sup>、り、五、ち、よ、今<sup>いま</sup>、ま、を、と、て、あ、ん、ち  
と、ど、も、に、榮<sup>いばら</sup>、誠<sup>まこと</sup>、え、せ、い、め、た、ま、し、。、ま、る、ち、ち、創<sup>つく</sup>、世<sup>よ</sup>、よ、り、さ、き、よ  
なんちと。ど、も、ホ、こ、も、ち、う、と、ろ、ろ、の、さ、う、え、誠<sup>まこと</sup>、得<sup>え</sup>、せ、い、め、た、ま、

六、あんち世<sup>よ</sup>、ち、り、ま、う、び、て、ま、ね、よ、ま、ひ、人<sup>ひと</sup>、々、よ、ま、ね、な  
んちの、名<sup>な</sup>、と、あ、ら、ち、せ、り、。、う、ね、ら、い、あ、ん、ち、の、屬<sup>まも</sup>、よ、い、て、なんち  
う、ね、誠<sup>まこと</sup>、ま、ま、よ、ま、ね、よ、賜<sup>たま</sup>、う、ね、ま、ま、と、あ、ん、ち、の、こ、ろ、を、誠<sup>まこと</sup>、守<sup>まも</sup>、り、  
七、う、ね、ら、い、ま、あ、ん、ち、の、ま、ね、よ、ま、ひ、の、い、皆<sup>みな</sup>、あ、ん、ち、よ、  
ま、つ、て、い、こ、い、る、。、ま、い、ま、れ、なんち、が、われ、よ、ま、ひ、い、言<sup>こと</sup>、誠<sup>まこと</sup>  
う、ね、ら、い、あ、ら、ち、と、ね、バ、な、り、。、う、ね、ら、う、ね、誠<sup>まこと</sup>、受<sup>う</sup>、ま、ま、と、わ、ら、あ、ん  
ち、よ、り、つ、て、い、こ、い、誠<sup>まこと</sup>、ま、ま、と、こ、ろ、に、知<sup>し</sup>、ら、あ、ん、ち、の、ま、ね、と、つ、り、  
ま、せ、い、こ、い、誠<sup>まこと</sup>、信<sup>まこと</sup>、ト、り、九、ま、ね、う、き、の、さ、う、め、よ、祈<sup>いのち</sup>、わ、が、い、の  
ま、ま、世<sup>よ</sup>、の、さ、う、め、よ、あ、ら、ち、なんちの、ま、ね、よ、ま、ひ、の、い、の、た  
め、あ、ら、ち、の、み、ま、ま、う、ね、ら、い、あ、ん、ち、の、ま、ね、あ、ら、ち、あり、十、凡<sup>みな</sup>、て



わがものをあんなちのものをあんなちのものをあんなちのものをあんなちの  
ものあり且  
それうねるよよりてさうえをうへ<sup>+</sup>われつまより世よを  
らば。うきうきハよよちうまうきんあんなちよいつく<sup>キリヤ</sup>聖父よあんな  
ちの<sup>キリヤ</sup>またまひーものをあんなちの名よをらーめあきう  
保守<sup>キリヤ</sup>てあきうのごとくうきうまもー<sup>キリヤ</sup>よあーたまへ<sup>+</sup>それ  
うきうとちもにありーときうねるをあんなちの名よをうー  
うてうねるまもりとまなんちのわれよ賜ーものをわきま  
もりー<sup>キリヤ</sup>そのうち一人<sup>キリヤ</sup>よほあひくるものあー。とて<sup>キリヤ</sup>沈淪<sup>キリヤ</sup>  
の子あらびうり。これ<sup>キリヤ</sup>聖書ようあらせん<sup>キリヤ</sup>めあり<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>それい  
まなんちよいつく。それ世よありてこのことをうてねるハ

わが喜樂<sup>キリヤ</sup>はうねるよみ<sup>キリヤ</sup>ーめん<sup>キリヤ</sup>めなり<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>それあんなちの  
こと<sup>キリヤ</sup>はうねるよさ<sup>キリヤ</sup>づ<sup>キリヤ</sup>のり<sup>キリヤ</sup>世ハ<sup>キリヤ</sup>うねるをにくむ。そあ<sup>キリヤ</sup>我<sup>キリヤ</sup>  
よの<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>さ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>るも<sup>キリヤ</sup>世<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>さ<sup>キリヤ</sup>ね  
ハ<sup>キリヤ</sup>なり<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>それあんなちよ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>る<sup>キリヤ</sup>は<sup>キリヤ</sup>世<sup>キリヤ</sup>より<sup>キリヤ</sup>と<sup>キリヤ</sup>り<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ぬ<sup>キリヤ</sup>く<sup>キリヤ</sup>とい<sup>キリヤ</sup>の  
ら<sup>キリヤ</sup>ば。とて<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>るを<sup>キリヤ</sup>保守<sup>キリヤ</sup>て<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>き<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>お<sup>キリヤ</sup>ち<sup>キリヤ</sup>り<sup>キリヤ</sup>ん<sup>キリヤ</sup>な<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>とい<sup>キリヤ</sup>  
の<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>それよ<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>屬<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>さ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>るも<sup>キリヤ</sup>世<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>  
あ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>る<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>なん<sup>キリヤ</sup>ち<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>は<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>るを<sup>キリヤ</sup>き<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>め<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>き<sup>キリヤ</sup>く<sup>キリヤ</sup>な<sup>キリヤ</sup>  
ん<sup>キリヤ</sup>ち<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>真理<sup>キリヤ</sup>あり<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>あ<sup>キリヤ</sup>んな<sup>キリヤ</sup>ち<sup>キリヤ</sup>それ<sup>キリヤ</sup>を<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>つ<sup>キリヤ</sup>つ<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>せ<sup>キリヤ</sup>  
ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>それ<sup>キリヤ</sup>も<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>るを<sup>キリヤ</sup>世<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>つ<sup>キリヤ</sup>つ<sup>キリヤ</sup>は<sup>キリヤ</sup>せ<sup>キリヤ</sup>り<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>われ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>き<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>た  
め<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>み<sup>キリヤ</sup>づ<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>を<sup>キリヤ</sup>潔<sup>キリヤ</sup>られ<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>ご<sup>キリヤ</sup>よ<sup>キリヤ</sup>より<sup>キリヤ</sup>ま<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>ね<sup>キリヤ</sup>ら<sup>キリヤ</sup>の<sup>キリヤ</sup>き<sup>キリヤ</sup>う<sup>キリヤ</sup>め<sup>キリヤ</sup>ら



せんごあなり 二 それをうねくのうめよのみいのらぎの  
ねらのをくよよりてそれを信じるものうめよも祈あ  
り 三 こいみあ 一 よあうんごあなり父よあんちそれよをり  
それまごなんちよ居おくのぶとくうねくもそれよよりて  
ひとつよあらんごあうら世をてなんちのそれをつこのをせ  
一 ころん信ぜーめんごああり 三 あんちのそれよたまひー  
榮張それうきうよさづけうりこのわねらの一 ちうごごと  
くうねくもさうひよひとらよなんごああり 三 それら  
らよをりなんちそれよをるそのうねらさてひとつよ全  
あうーめうら世をてあんちのそればつこのせーことま

たあんちそれを愛するごとくうねらごもあいのほること  
一 ーうんとなり 言 父よなんちのそれよ賜ーものわご  
をるところよまきとごもよをりてわが榮まるはちなんち  
ごそれよたぬひーものをみんなことをねごよ。その世基をお  
のざらまーさきふなんちそれよあいのうねばあり 五 ー  
きちよ世のなんちをあらびそれのなんちを識うねくも  
なんちのそれをつのはせーころん信ぜり 六 それあんちの  
名をうねくよあめせり復られぬーめさん。そをなんちのこ  
ねねあいのほるの愛うねくよをりすこそれうきうよをらん  
ごあなり



第六章

耶穌

耶穌このころ残りひてのちそのでしとともたひて  
 ケデロンの河をまはりそのところある園のうちを  
 とともよりぬニ耶穌をわたりたるユダこの處を去れり  
 いはれをくその門徒とともよりぬニあるまじしとせらば  
 三このときユダ一隊のつれものをんたと羣吏ぐんしといのむを  
 ちちよびパリサイのひとよりうけ炬たきとろうちんと兵器を  
 くらきてこゝにまきされ四いはい事のおのむよおよを  
 んときをこゝにぐく知いでしうれよりひるる誰を  
 づぬるの五うれらこゝにけるハナザレの耶穌あり六いはい  
 ほうれよりひけるハマれをそれあり耶穌をわたりユダ

六 耶穌

うれとともまたより  
 とひひとぬるるときうれよりありそまて地またれより七  
 いはいまこゝにれよりたれをたれぬるやとさひしひり  
 ほうれよりナザレの耶穌なりとつれいはいはこゝにけるわ  
 れまをななんちより我いそれなりとつれしめしそれた  
 づぬるありバこの輩をゆるしとさらしめよ九うれ耶穌を  
 れよとぬひしめはうち一人とありあるものありとい  
 ひし言はかたをせんためなり十うれよシモンペテロ劍をか  
 びよりしとあれをぬきて祭司のたしれまをぶをうちてを  
 のみぎの耳をきりおとせり。まをぶの名をマルクスといふ十一



耶穌イシュペテロペテロよりひけるはつらぎを鞞ツツはとらちよ父チのそれ  
よとゆひ一杯コップをそれのまきらんや十二らとて隊タビのつもの  
およびそのらとエダヤ人のあそやう耶穌イシュはとらん志  
はりて十三まらうれをアンナスのもとよつせゆと。うれんこの  
歳のさいのをさカヤパの外舅カウジなるよよとそあり十四エダヤ  
びとよ議ギてひとり民タミのうめよゆるい益タビありといひい  
このカヤパかりき十五シモンペテロとありよひとりのでー耶イシュ  
穌イシュよあそとらり。このひとりのでーの祭司シヨウジのをさのあると  
らるのものよて耶穌イシュとともよさいのをさの庭ニワより十六  
ペテロも門外カドノウチよとてら。さいのをさのあるとらるのせーい

で、門カドをまらる婢メカドよつげてペテロをともあひりる十七こよ  
おいてもんをまらる婢メカドペテロよひけるはなんぢもこの  
人ヒトのでーれひとりなうばやペテロあうばとつふ大志オホシも  
どもとあそやうとら寒サムイよよりて炭ヒツをたきそのとらあまた  
ちてあた、まるペテロもうれらとらまたうちて煖カウジれり十八  
さいのをさ耶穌イシュよそのでーとその道ミチのこくとはとらぬ十九  
耶穌イシュうれよとらけるはうらあうたよ世ヨよこつてはり。それ  
つねよエダヤびとの平生ヘイセイあつまるところなる會堂カイドウおよび  
聖殿ミヤよてをくをかひそつよかてはることかな二十なん  
ぞそれよたらぬるや。それいこよかてりしう聽ミコトものふとら



ねよ。うれしやがひひーとてろなれそ。三 耶穌いはいらくひひー  
ようさりろまたてるひとまのしやま小吏しやまてのひらまてうれと打  
つひけるななんぢさい一の長さきよこころあるよかくのぶとつき  
ら 三 耶穌いはいうれよこころけるいひーやぐくつりーことよころ  
らばそのようろざるを證あかしせよ。いひよくばなんをまねを  
うつや 二四 さてアナスいはい耶穌いはいぢまはりてさい一のをさカヤバ  
のゆとよおくれそ 二五 シモンペテロ立たてあてまりてりー  
あろひとぐひけるいあんちもうれの門徒かどのひとりなる  
ぢやペテロうけづのばーてあろとつり 二六 さい一の  
をされまもぐの中うちのひとり 即すなはちペテロよみくをそぐれー

ゆの親戚しんせきのひけるいあんぢうれとともともに園うゑをあ  
りしをみよあろばや 二七 ペテロまさうけづのば。やぐて 難むづ  
なきぬ 〇 二八 ひとぐ耶穌いはいをひきてカヤバカヤバの公廳こうていよゆけり  
時とききやよあけありき。うれら汚穢けがとうけんこころぢおそれ  
てやくあよのらば。そのまきこころのいぢひを食たせんとき  
れをなり 二九 ピラトのやうれよひひけるいひらある訟いんを  
ゆてこのひとぢうろつあるや 三〇 ひとぐこころけるいひれ  
ゆー悪銭あくせんあせるものよあろばなんぢよわさす 三二 ピラト  
うれよひひけるいなんぢらこねとてまあんぢらの律法りつぽう  
よあててひてさるまきせよユダヤのひとぐうれよひひけるい



それらよひとりばらばらの権あり。これ耶穌のその一をん  
とけり。状をさしてかかれり。ことごとかある。三三  
ピラト復や  
く。よ。よ。り。耶穌をよひてひける。あんぢハユダヤびと  
れ王ありや。三三  
耶穌うれよ。く。く。たる。い。なんぢ。この。こと。は  
いつる。い。み。ら。り。よ。よ。る。る。それ。よ。つ。い。え。ん。の。つ。げ。よ。よ。る  
三三  
ピラト。く。く。け。る。い。ま。ね。い。ユダヤ人。ならん。や。あ。ん。ぢ。の  
く。の。民。と。さ。い。の。長。と。なんぢ。と。さ。き。よ。わ。く。せ。る。を。なんぢ  
なん。と。あ。せ。や。三三  
耶穌。く。く。く。る。い。ま。が。國。ハ。この。世。の。く  
に。よ。あ。ら。ば。り。わ。ら。に。こ。れ。よ。の。國。な。ら。ば。わ。ら。が。志。も。ぐ。と  
れ。と。ユダヤ。び。と。あ。わ。く。さ。さ。る。く。め。よ。く。く。あ。べ。い。さ。ね。と

それらあハこの世のちにあらざるなり。三三  
ピラトうれよ。い  
ひける。い。さ。ら。ば。なん。ぢ。ハ。わ。ら。あ。る。る。耶穌。く。く。け。る。い。あ  
ん。ぢ。の。い。ふ。と。こ。ろ。の。く。く。わ。き。の。王。あり。わ。き。これ。が。あ  
よ。生。れ。が。あ。り。よ。世。よ。き。これ。を。その。眞。理。あ。つ。い。と。あ。ら。い  
と。な。さん。く。め。なり。ま。く。て。ま。く。と。につ。く。も。の。ハ。その。聲。と。き  
三三  
ピラト。うれ。よ。い。ひ。たる。ハ。眞。理。ハ。いつ。あ。る。も。の。ぞ。や。この  
く。く。を。いつ。る。の。ち。ま。さ。出。て。ユダヤ。び。と。あ。り。ひ。たる。ハ。それ  
ハ。この。人。よ。つ。み。あ。る。と。み。ん。三三  
爰。あ。ん。ぢ。よ。い。と。ら。は。例  
あり。それ。ま。ぎ。こ。の。節。よ。ひ。と。りの。囚。人。と。なん。ぢ。よ。ゆ。る  
は。なん。ぢ。ユダヤ。び。と。の。王。を。ゆる。さん。く。く。を。ゆる。う。あ。や。四+



ひとりぐまご喊叫さけびのひけりこのひとよあはばバラバを釋ゆめ  
バラバをぬれびとなるあり

第十九章

そのときピラト耶穌をもちてもちうる 二兵卒ども

いぢらして見候まはあみうれの首くびをかぢる一ぬまごむくさき  
の袍ろほばきせて 三ひけりユダヤびとの王みやんうれこのく  
て掌てのひらめてくれとうてま 四ピラトまごそとにいせまうれと  
いひけるをこれうきよついで罪つとある候まばくれをあらせ  
んとてあんぢらよひきりせり 五いぢれ棘いばらのうらぶき  
うぐりむくさきのうらぶきをきてそとよ出でピラトうれとよ  
いひけるいみよこれそれ人ひとなり 六さの一の長ながとちとあご

やくこれとて十字架こゝろよつけよあふドかよつけよとさけ  
びりよピラトうれとよひけるいなんぢらうれととりてあ  
ふドかよ針はりよこれうれとよつみあまみざるあり 七  
ユダヤびとくれよこくけるいわれよ律法おきてありそのあき  
てよあごぐくバクまの死しべさのあり。それうれみらうら  
を神かみの子とあせんなり 八ピラトこのころをばきてまはく  
おそる 九まご公廳きやうよりていぢれよひけりいなんぢい  
づこのものぞ耶穌いしすこくせざりま 十ピラトこりまよひけ  
るいわれよこくざら我われなんぢをあふとよつちる權けん  
威いありまごあんちをゆるけけんおありこのころばらさ



まう士 耶穌いはいこころけりなんち上よりけんぬれまう  
はばまねよむうひて權威けんいあることなりこのゆゑよまねぬ  
なんちまうせしものれつみ尤もとおろいなり士このれち  
ピラトピラトうねとゆるさんと謀まあうれどもユダヤびとさけん  
でひひたるをもしこれとゆるさばカイザルカイザルは忠臣ちゆうしんあうばま  
べてみづうと王わうとなんものもカイザルカイザルよそむくものなり  
士 ピラトピラトこのことをきて耶穌いはいをひきいざり鋪石ふせきとつ  
るところへブルブルのころをよせとけをガバタとつとところの  
さもきの座ざよみづうとまわれり 西せいそれ日ひはほぎこころのい  
まひの備日そくひよせとまらんおろよを十二時じふにじころなりまピラト

ユダヤびとよひけるはなんちうの王わうをみよ十五うれとさけ  
びてこれぬ除ぬこれれのをけ十字架じゆうじふよつけよとつみピラト  
うまうにひひけるはまねあんぢうの王わうとトトウ小釘せうていべ  
けんや。さいのをさうちこころけるはカイザルカイザルの他たわれ  
まうちなり六つみよピラトピラトうれと十字架じゆうじふよつけしめん  
てうまうよわせり。こころよおいてうれと耶穌いはいととりてひ  
まゆけま七耶穌いはいトトウをあひて髑髏ぶつろうとつとるところ  
へブルブルのころをよせつとつバゴルゴダゴルゴダとつとところよゆけま。こ  
れとところよせ八うれと十字架じゆうじふよつけしり。あうよ二人ふたりのも  
のうれとともよ十字架じゆうじふよつけらる。ひとりハ右みぎひとりハ左ひだり



いほん中よをねを 九ピラトきてあざら十字架よつけ此い  
ユダヤびとの王あるナザレのいほんなりとある一なり 二十か  
なくのユダヤびとこの罪標をよめをぞん耶穌をどふトウ  
よつけ一とところハ京城よちつけきバありそのあざらへナル  
ギリシヤ羅馬のころをよて書りニユダヤびとの祭司のを  
さうちピラトよつひけるいユダヤびとの王とあるはあくれ  
みらうユダヤ人のわうなりとつひ一とあるは一三  
ピラトこうくけるいころがあるせ一とある巴よある一あり  
三ついそのとも耶穌をどふトウよつけ一のちそのうをぎ  
をとり四よわけておのくその一ととりまゝあざらとこれ

も。この裏衣ハぬひめあくらよりまらとく織るものなり  
けれハ 二たぐひよつひけるいころ裂け一とあけのもの  
よならんう闔よはべ一。この聖書よあけたぐひよわが衣  
をわけろがあざらとトよれとつひ一よかなをもせんうめ  
あり兵卒どもまやよこのころはあせり 三さく耶穌のま  
とまの姉妹およびクロパの妻の MARIA ままマダラの MARIA  
その十字架のうをまらよとてり 四いほを母とあはゆると  
ころの門徒とうさつらよとてをみてまらよつひけるい  
婦よこをなんちの子なり 五まごせよつひけるいこをな  
んちの母あり。このときその門徒うれをおのれの家よつれ



ゆけり 三 うくて 耶穌いせい まぐて のうらむまをまをちれる 哉や 志  
聖書せいしょ かなハせん うめまわれ 渴かつ とつらん 元もと このとを  
醋す のみちる器うつて 皿た あり へいそつとも 海うみ 絨じやう をまよ  
ひく 牛ぎう 膝せつ 草そう につけて その口くち ばあふ 三 いはれ 醋す とうけ  
一のちひけりハ 事こと をしりぬ うらむ哉や されて 靈たま 哉や ちせ  
三〇 三 この日ひ いたむひのそまぐ びなり。このあんそくまち  
ハ 大おほ あり あんそくまちなれば 屍しかばね を 上うへ ぶドウのうくよおそ  
うらむ哉や このまきうらむ ぐ ゆゑよ ユダヤびとピラトよむつひつ  
れらの脛すね 哉や 折お けて そのあふ ばねとつりのそくうらむ 哉や おく  
三 三 あくよはいく 兵卒へいそく とも 耶穌いせい ととも 十じゆ 字じ 架か よつけら

れ 一のれひとり のあしとさきよ 折お つぎよまきひとり の  
あし 哉や をり 三 のちよ 耶穌いせい よきうらむ 一ひと 人ひと のうらむ 哉や ちよ 死し うらむをみ  
て そのあし 哉や をらさうき 三 一人ひと のうらむ 哉や ちよ 骨ほね  
 哉や つきければ ちよ 血ち と 水みづ とながれ のせうり 三 一ひと 人ひと の  
み 一の 證あかし をたつ。そのあし 一ひと 人ひと のうらむ 哉や ちよ 信しん せうめ  
うらむ 一の 眞まこと ありと 一ひと 人ひと のうらむ 哉や ちよ 骨ほね のひとつを  
んが ちよ あり 三 このこと 成な り。あふして その骨ほね のひとつを  
もく づつ ぎらふ べしと あふよ 應おこ せん ちよ あり 三 三  
書しよ よ うらむの 刺さ しものを うらむ みる べしと 三 〇 三  
の 哉や ちよ あり マタヤの ヨセフとつらむ 一のよて 前まへ よ ユダヤびと



なほそれて隠ひそまいはまのてしとあれるもの耶穌いのまかを  
ねとどらんとしてピラトピラトは求もとピラトピラトにねとゆるせしより  
きつりてその屍まをとねり三 ますさきは夜間よいひまよき  
そーニコデモといふひと没し薬やくと蘆あ薈わいはませおよそ百斤ひやくを  
りたらさくきつる 早はやくねら耶穌いのしつねととりてユダヤ  
びとの葬くわのなうやよあさうひにねは布のと香かうよてつめ  
ま四さて十字架じゆうはつけしそのあさりよそのあり園そのはうち  
まいまさ人とまうふりしうとなきあさうしきはかあり四  
この日ひハユダヤびとのいもひのそあく日ひなりま墓はちか  
まけねばそし耶穌いをおけま

第二十章

一週いっしゅうのしるめの日ひはあさいまごころきうちよマダラ  
のマリア墓はよきつりて石いのまかよりとりのけありしと思おもニ  
つひふシモンペテロペテロまて耶穌いのあいせしところの門徒かどよち  
まもきてしひけるはまのより主まととりしものあり。それら  
つづこよおきしやその處ところはしつば三ペテロと彼かひとりので  
しつで墓はよち四あつりともよちしありのでしペテロ  
よりとく趨たてさきふはつふしつね五俯たてあつるねとつ  
みし布のをおけるをみられともしつば六シモンペテロペテロねよ  
おられてきつり墓はよつりつみしぬの紙かみおけるを見みつり  
七 そのうらべ紙かみつみしてぬぐひし屍まを裹ましぬのととも



おうばをふしてあつのとらるゝ疊たまておけそハこゝよおい  
てさきよ墓はかよきこゝれをあらせしむりられ試みて信せ  
そ九九あるして耶穌いすのよみうくるべきこゝのあるとりねら  
いまざあらざるなり十十かきて門徒かどハおのれのやとよく  
れり十一十一マリアマリヤの墓はかのそとよたちて哭なみつはかよむりひり  
みて十二十二ふりりの天使てんし一ろきころもを著きいぬきのあつりね  
とおきりり一とらるの首くびのかよひとり足あしのうとよひと  
十三十三坐ま一をり試しみりり十四十四天てんのつりひうれよひけるハ婦むすめよ  
なんぞあげくやうれこゝくけるハそが主しゅととり一のあ  
りり十五十五おき一をあらざるあり十六十六のこゝひてあり

う十一耶穌いすのたち一をみる。されども耶穌いすあることと一ら  
ハ十五十五いぬけくれよひけるハとんまよあんどなげくや誰たれ  
ととらぬるハマリアマリヤ園そのとまゆるひとならんとおもひうれ  
よひひけるハ君きみよなんぢ一うれととび移うつりなうバハ  
十七十七づこよおき一うれよつげよわをちれを取とべ一十八十八耶穌いすら  
れよマリアマリヤととり婦むすめ一うれよラポニととりこ。こ  
ち後のちらけば夫子ふしあり十九十九いぬけくれよひけるハうれよ押おし  
ことなうれこれいまざそが父ちちよのちらざるがなを。そが兄あに  
第二十二十弟あによゆきてりハうれハそが父ちちちあつちなんぢらとち  
二十一二十一の神かみまをほちなんぢらがかみよ升あがりと 六六ママググダダララののママリリアア主しゅ



預みーこゝ主のらくかのれよりひくくるとりかこ  
とを門徒たちよゆきてつた○<sup>九</sup>この日れれうごまか  
もち一週ひんちゆうのもための日でーうちユダヤびとをおそるよ  
よりてあつたれうとられ門徒たちおきーが耶穌いせすきり  
てそのうちようちうれうよひけるハあんぢう安うれ<sup>十</sup>  
らくいひーのちそれ手とあをれれうれよ見をでーたち主  
預みそあちうべ里<sup>二</sup>耶穌いせすまううれうよひけるハなんぢ  
らやれうれ父のまき返つたせーごまわれもなんぢら  
と遣ん<sup>三</sup>らくいひーのち氣をまきせうれうよひけるハ  
聖靈せいりゆうと受けよ<sup>三</sup>あんぢう誰のつみ返ゆるんともその罪ゆ

るされとまのつみを定るともそのつみさざめらるべー<sup>二四</sup>  
耶穌いせすきりーとき十二じふにのでーの一人あるテトモとらるあ  
るトマスうれうともよとらざりき<sup>二五</sup>このゆゑよほの門  
徒うれうひけるハそれ主とみりトマスうれうよひ  
けるハそれよーその手よらぎのあれ見もぐあびと釘の  
あよまきーわが手とそのあぐよさんよあはば信ぜト  
三八日<sup>さんぱつじつ</sup>預れひきてのち復でーうちくのうちよとりけるが  
トマスうれうともよをれ門徒とちらるよ耶穌いせすきりて  
そのうちよ立てひけるハなんぢらやまてうれ<sup>二六</sup>つひよ  
トマスよひけるハなんぢの指をうよのぐてまがしを見



あんぢの手球のべてそがあぢらよさせ信せざるなうれ信  
せよ 六 トマスこゝろてうれよひけるいわが主よわが神よ  
元いほけうれよひけるいなんぢそれとみよよりて信  
んぢみびしてしんぢるものいさいたまひあり 三 この書はあ  
るさうあうなやあまこのあるしと耶穌でしのみくみてあ  
せり 三 このあみとあるせういなんぢらとして耶穌のかみ  
の子キリストあるらう信ぜしめこれとあんとその名よ  
よりていのちとえせしめんごうあり

第三章

このち耶穌まてテベリアのみづうみまてしんぢらよ  
かのれとあうりせり。そのあうもせること左のごしニシモン

ペテロとデトモといへるトマスおよびガリラヤのカナのナタナヘル  
とセバダイの子らちまてらうの二人のでしんぢらよあり 三  
シモンペテロうれらよひけるいそれ漁はゆうん。うれらよ  
ひけるいそれらもちもよ申うん。うれらいでく船よのしんぢ  
らこの夜いなにのえものもあうりき 四 まてよよもあけた  
るに耶穌まてしんぢらよ。されど門徒らちそのいほけあるこ  
とを考う 五 耶穌うれらよひけるいそれら子らよよ食  
物あるやうねらうてんらるいあし 六 耶穌うれらよひけ  
らう網をふねのみぎらうてんら獲物あらん。つひよあみをう  
つ魚おほきよよりてひきあらうことあうらまてしんぢらよあ



いそ耶穌いそほのあひせーところの彼かでーペテロよひひけるを  
られ主しゅありシモンペテロ主しゅありとききて裸はだかありしづらるも  
をつけ帯おびしてうみよとびりねハあうのせーたちい小舟こぶね  
よてうせのりりたるあみとひきてつれりその岸きしをさる  
うくそなうらび五十間いそよをうりありければなり九岸くきしよつき  
ーは炭火まきびとそのうくよのせさる魚いそおよび餅もちありはさる  
十耶穌いそほうれよよひけるはりぬとせーところのうをば少せう  
もちきうれ士シモンペテロあねは往むかあみとまーよひきした  
まーよその網あみのなうよおろきあるうを百五十三尾ひゃくごじゅうさんびりり  
まうくおほうりければあみハやおさざりき士耶穌いそほうれ

よひひけるはきりて食たせよ。でーち敢あてうれよあんぢ  
ハこれちるとたづぬることとせだ。こハ主しゅありとあねハあ  
そ耶穌いそほきりてパン餅もちりりうれよあう魚いそもま  
そのごくとせり士い西さいによみぐりーのち自己おのれをでー  
ちよあうをせることとあれ三次さんじなり士さてうれ食たしそ  
ち耶穌いそほシモンペテロよひひけるハヨナの子こシモンよあんぢこ  
れらのものよまさりてそれと愛あひはるや。うれひひけるハ  
よ然まさわぐなんぢはあひはるうとのあんぢあねを耶穌いそほうれ  
よひひけるハまうが羔あひ餅もちうくまうとあうびうれよひひけ  
るハヨナの子こシモンよまあれはあひはるう。かきつひけるハ主しゅ



よきうりわがあんぢはあいまるこころのあんぢーきり耶穌  
うれよりひけるのわがひつどを救まそびうきよひ  
けるのヨナの子シモンよそれ救あひけるのペテロよび我と  
あいまるこのといをねーよよりて憂うきてこころけるハ主  
あこころるこころあかーろづなんぢを愛するこころのなんぢ志  
れを耶穌うれよりひけるハろづひつどを救まこころみか  
んちよつげんなんぢ幼ときみづうろ帯こころよまろせ  
てあるきぬ老ての手にのぐんなんぢはろくろこころよか  
あひさるところよひきりらん 丸ころのころるのそのの  
ある死よを神救あがめんとりよこころを志あーるなるこ

れ救ひてのちまこころれよりひけるハ我よまろこころ 平  
ペテロありうり耶穌のあいせーでの志こころるをみる。  
このでーの食はるときいよのむねよよりて主とまろ  
ものなそれぞやとこひー門徒あり 三ペテロうれよきて耶  
穌よりひけるハ主よこの人いうよ 三耶穌うれよりひける  
ハそれよりうれがあがろくてわがきこころをまらとのぞま  
ハ爾よかふのうしもちあらんや。あんぢのこれよ從 三  
よおのてこの言きやうごのうちよつてらるまでこの門徒  
ハあはとりつて。されども耶穌ペテロよこれハ志あはとい  
ひーよあは。まきよりうれがながろくてまら來とまら



のぞまばなんぢよあよのこうりしをあらんやといひなり  
二四 あれらのこゝよついで證をなすまことこれ証あるせよ  
のそその門徒あり。それそのあつゝの眞なるこゝに  
三 耶穌のなせーこゝんこれのあつゝなほあまこあり。  
一々あるまばその書この世よのせつとけこ  
とあつゝとおもひありアーメン

新約聖書約翰傳終



95-91197

1602  
AUG 1 1940



